熊本県山鹿市菊鹿町方言の
動詞屈折形態論

2018（平成 30）年入学
言語学・応用言語学専門分野
立花千夏
2022（令和 4）年 1 月提出

要旨

本論文の目的は，熊本県山鹿市菊鹿町において話される方言（以下，菊鹿方言）の動詞屈折形態論の記述，特に継起副動詞形，いわゆる動詞テ形（例: /kooti/「買って」）の派生規則を分析することである。菊鹿方言は肥筑方言に属し，熊本県における方言区画では熊本北部方言に属する。菊鹿方言の動詞屈折形態の網羅的な記述は本論文が最初となるが，同方言区画に属する熊本県菊池市において話される菊池方言については, 藤本（2002, 2004）に豊富な記述がある。しかし，カナによる表記，それに伴う形態素分析の欠如，菊池方言の体系に必ずしもそぐわない学校文法の枠組みによる記述など, 様々な問題を抱えており，本論文ではそれを乗り越えるような形での記述を試みる。

1 章では，方言の概要を述べる。2 章では，音韻論を記述する。3 章では，動詞屈折形態論を記述するための導入を行う。4 章では，動詞屈折形態論を記述する。5 章では，継起副動詞形の形態音韻交替を記述する。6 章では，本論文のまとめと今後の課題を述べる。

目次

1. 本論文の目的 **1**

2. 先行研究 **2**

2.1. 対象とする方言の概要 **2**

2.2. 先行研究が抱える問題 **2**

2.2.1. 採用する枠組みの問題 2

2.2.2. 記述の中身の問題 **4**

3. 菊鹿方言の音韻論と形態論に関する概観 **5**

3.1. 音素 **5**

3.1.1. 母音 **6**

3.1.2. 母音の連続 6

3.1.3. 子音 7

3.2. 音節構造・音素配列 **10**

3.3. 主要な音韻規則 **11**

3.3.1. 母音融合規則 11

3.3.2. 接辞の初頭音/r/削除 12

3.3.3. 音節/ru/の鼻音化 12

3.3.4. 語幹末分節音/r/の同化 13

3.4. その他の音韻的特徴 **13**

3.4.1. 語末の狭母音の無声化 13

3.4.2. 非過去肯定接辞に含まれる/u/の無声化 14

3.5. 屈折と派生 **14**

3.6. 語根・語幹・語基 **15**

3.7. 例文の提示 **16**

4. 菊鹿方言の動詞屈折形態論 **16**

4.1. 調査 **16**

4.2. 動詞の語幹クラス **17**

4.2.1. 子音語幹動詞 18

4.2.2. 母音語幹動詞 19

4.2.3. 変格活用語幹動詞 19

4.2.4. 母音語幹動詞の r 語幹化 19

4.3. 屈折接辞 20
4.3.1. 直説法 20
4.3.2. 義務法 22
4.3.3. 意志法 23
4.3.4. 命令法 24
4.3.5. 副動詞 25
5. 継起副動詞形（いわゆるテ形）の形態音韻交替 29
5.1. 扱う現象について 29
5.2. 先行研究 30
5.2.1. 継起副動詞接辞に含まれる母音の交替 30
5.2.2. 長母音の短音化 32
5.3. 調査方法 34
5.4. 調査結果 35
5.4.1. 語幹ごとの/te/の振る舞い 39
5.4.2. 子音語幹動詞における継起副動詞接辞の母音の交替 40
5.4.3. 母音語幹動詞における継起副動詞接辞の母音の交替 40
5.4.4. 長母音の短音化 41
5.5. 継起副動詞形における形態音韻規則 43
5.5.1. 子音語幹動詞への接続 43
5.5.2. 例外 45
5.5.3. 母音語幹動詞への接続 48
5.5.4. 母音語幹が r 語幹化している場合の接続 48
5.5.5. 変格活用語幹動詞への接続 50
6. おわりに 50
参照文献 52
付録 53
グロス一覧 76

1. 本論文の目的

本論文の目的は，熊本県山鹿市菊鹿町において話される方言（以下，菊鹿方言）の動詞屈折形態論の記述である。菊鹿方言の動詞屈折の体系を初めて記述するとともに，特に近隣方言にも報告される継起副動詞形，いわゆるテ形（例: /kooti/「買って」）の複雑な形態音韻交替について，ルール・オーダリングの形で一般化する。熊本県山鹿市菊鹿町は熊本県北部に位置する町で，人口は 5,688 人[1]（2021 年 3 月 31 日現在）であり，熊本県菊池市，福岡県八女市，大分県日田市に隣接している。

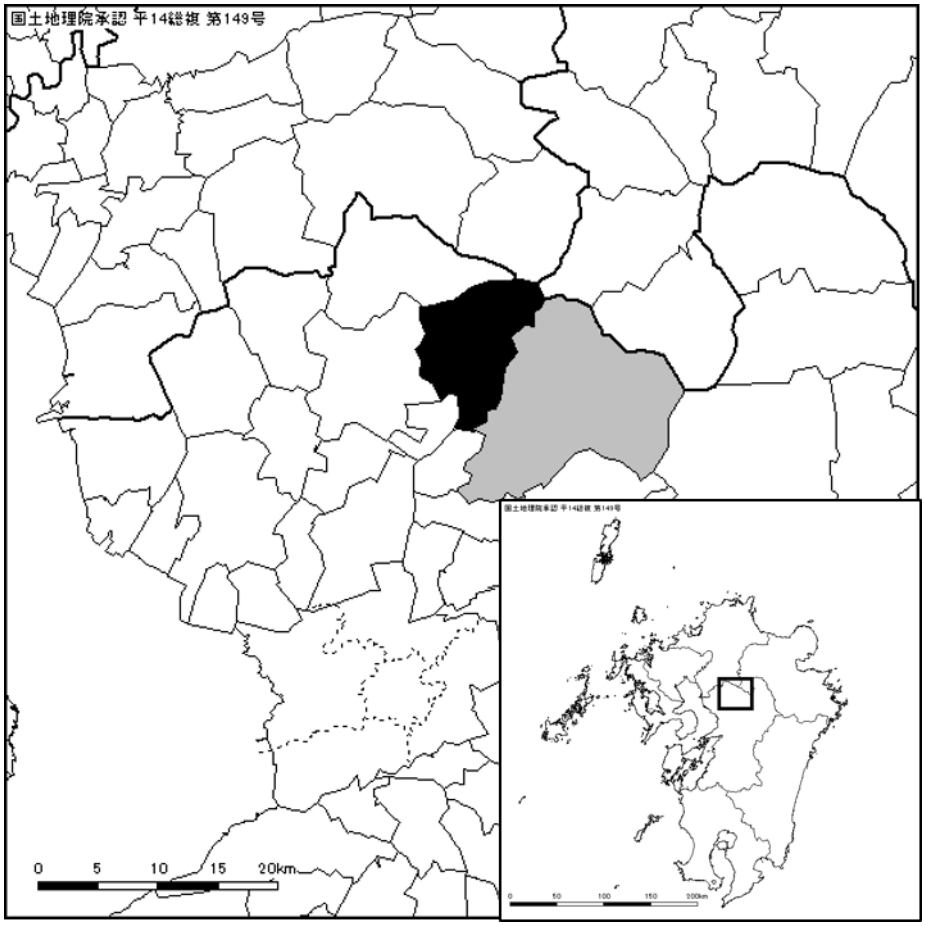

図 1. 熊本県山鹿市菊鹿町（黒色），熊本県菊池市（灰色）

当方言は記述が乏しく，その音韻・文法を含め本研究が最初の記述研究となる。2.1 節で後述するように，近隣方言に関しては動詞形態論の記述があるものの，カナによる表記，それに伴う形態素分析の欠如，体系に必ずしもそぐわない学校文法の枠組みによる記述な

[1] 「地域・年齢別人口」https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/www/contents/1550216353600/index.html（2021 年 1 月 6 日最終閲覧）

ど，様々な問題を抱えている。本研究では，音素分析に基づく音韻表記，形態素分析，基底から表層を導く形態音韻分析を採用し，これまでの研究の問題点を解決することを目指す。

2. 先行研究

2.1.対象とする方言の概要

菊鹿方言は，東条三分説（上村 1983: 7）における肥筑方言に属する。肥筑方言の特徴として，カ語尾形容詞や，主格にノを用いること，終助詞にバイ（わ）・タイ（のよ）を用いることなどが挙げられる（上村 1983: 18-25）。

また，菊鹿方言は，熊本県の方言を北部・東部・南部と区画した場合，北部方言に属する。熊本北部方言の特徴として，平板一型アクセントであること，サ変命令形として「仕事バセー」のような形を取ること，下二段活用動詞「ズル・ヌル」が優勢であることなどが挙げられる（秋山 1983: 212-214）。

本研究の直接の記述対象である菊鹿方言には先行研究が存在しない。しかし菊鹿町に隣接し，同じ方言区画に属する，熊本県菊池市の方言（以下，菊池方言）については，藤本（2002）および藤本（2004）において豊富な動詞活用の例が挙げられている。

2.2.先行研究が抱える問題

2.1 節で述べた先行研究，藤本（2002）および藤本（2004）の記述的な価値は高いが，これまでの記述は，カナによる表記，それに伴う形態素分析の欠如，菊池方言の体系に必ずしもそぐわない学校文法の枠組みによる記述など，様々な問題を抱えている。とりわけ複雑な形態音韻交替を示す，継起副動詞形関連語形については，このような枠組みでは非経済的で記述的な妥当性を欠くものとなる。これらの問題点の多くは，菊鹿方言の記述を行う上でも有用であると考えられる。そこで，以下では藤本の記述に見られる問題点を取り上げ，それらを解決する方法を提示する。

2.2.1. 採用する枠組みの問題

2.2.1.1.学校文法の枠組み

藤本（2002）は菊池方言の動詞活用の記述に際して，いわゆる学校文法の枠組みを採用している（表 1）。学校文法の枠組みは菊池方言の体系を記述するのに必ずしも適したものではない。まず第一に，「活用」が語形変化と語幹の変化を混同したものであり，内的一貫性を欠いているという問題がある。例えば表 1 で，終止・連体・仮定・命令は語形であるが，未然は語幹の形であり，連用はどちらかわからない。従って，これが一体「何の体系か」がわからない。

第二に，菊池方言には不要な区別がある一方，必要な区別ができていない場合がある。例えば，終止形と連体形の区別は菊池方言には不要である一方，後述する副詞節形成の動詞語形はそのほとんどが記述できない。

最後に，ある言語の活用体系を記述する際は，その語形変化のリスト化に加え，その語形変化がどのような文法カテゴリーに応じたものかを明らかにすることが重要であるにも関わらず，学校文法では文法カテゴリーがそもそも固定されている。例えば，表 1 の「書ク」の活用において，テンスが文法カテゴリーであることは（学校文法の暗黙の前提を知らないものには）わからない。極性に関しても同様である。

表 1. 書クの活用（藤本 2002: 90）

語	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
書ク	カ コ	キ イ （キ）ャー	ク	ク	ク イ キャー	ケ

このように，個別方言記述の際に学校文法的な記述方法を取ることが，体系的な記述を困難にし，個々の方言の実態をむしろ捉えにくくする。一方，方言間比較を行う上で，このような共通枠組みは一見便利に見えるが，上述の通り，個々の方言の文法カテゴリーの多様性が方法論的に描けない以上，方言間比較すら不十分である。すなわち，どのような目的であっても，学校文法の枠組みにメリットはない。

2.2.1.2. カナ表記の弊害

藤本（2002）は，菊池方言の文法を全て漢字仮名交じりで記述している。仮名表記での記述が抱える問題として，子音と母音の間に形態素境界を入れることができないという点が挙げられる。そして，菊池方言の記述を仮名表記で行なう上でも，問題が生じている。

例えば，書クの未然形として記述されている「書コ」に関して，藤本（2002）は以下のように述べている。

(1) 書クの未然形「書コ」について

五段の未然形が意志形を作るときは，意志ウが未然形に吸収されてしまう。従って，この意志形は純粋な五段動詞の未然形ではなく，意志の助動詞ウの働きも兼ね備えた，一人二役の未然形であることを確認しておく必要がある。

[藤本 2002: 91]

藤本（2002）はこのように分析を行なっているが，例えば「書コ」を形態素境界に分け

て考えるとすると，次のような分析も可能である。

(2) *kako*
kak-a-u
書く-THM-INT
「書こう」

[筆者作例]

この分析は，kak-「書く」という動詞の a 拡張語幹に意志を表す接辞-u が後続し，au が母音融合して oo となり，oo が短母音化してできた形ではないかとする分析である。

(1)において「意志ウが未然形に吸収され」るという複雑な分析がなされているが，語を形態素に分けて分析すれば，(2)のような単純な説明も可能である。しかし，子音と母音を切り離すことは，仮名表記では不可能である。

2.2.2. 記述の中身の問題

藤本（2002）は菊池方言におけるある形態音韻交替について，法則立てしようとする際，その「法則」をはっきりと示さないままに分析を終えてしまっている。つまり，観察的な事実を列挙するだけに留まり，一般化ができていない。藤本（2002）は継起副動詞形における形態音韻交替の一般化を試みているが，結果として一般化ではなく，どの音便形でどの継起副動詞接辞[2]の表層が現れるか，という網羅的な列挙に留まっている。菊池方言の継起副動詞接辞の振る舞いについて，藤本（2004）に詳細がある。以下に，継起副動詞接辞の表層が/ti/となる場合についての記述を一部示す。

(3) 【チ】〖接助〗～て。
① 動詞ウ音便に接続する。（但し，バ行～呼ぶ，など，マ行～読む，などに接続するのは，ジ。）
ヨカ　キモンバ　コーチ　カイル。（いい着物を買って帰る。）
② 動詞カ・サ行イ音便の音変化に接続する。
エバ　キャーチ　ダス。（絵を描いて出す。）
カサバ　シャーチ　イク。（傘をさして行く。）
③ 動詞ラ行の促音便に接続する。
アスケ　アットバ　トッチ　クレ。（あそこにあるのを取ってくれ。）

[2] 藤本（2002）および藤本（2004）では，接辞ではなく「接続助詞」として扱われているが，ここでは本論文での分析方法に則り「継起副動詞接辞」と記している。

④　動詞下二段の連用形に接続する。
アケチ（明けて，開けて，空けて）
ウケチ（受けて）
カケチ（掛けて，駆けて，賭けて）
コゲチ（焦げて）…。

[藤本 2004: 326 より一部抜粋]

このような記述が藤本（2002）においてもなされているが，藤本の記述は継起副動詞接辞の表層形の使い分けの列挙であり，一般化ではない。このような事態を避けるため，本論文では，何が観察的な事実でどこからが分析であるかを明確にした記述を心掛ける。

3. 菊鹿方言の音韻論と形態論に関する概観

本章では，音素，音節構造，形態音韻規則の記述と，形態論記述にあたっての諸単位の定義づけを行う。以後，音声表記は[ ]で，表層の音韻表記は/ /で，基底の音韻表記は// //でくくって示す。

3.1. 音素

菊鹿方言の母音音素，子音音素をそれぞれ示す。

表 2. 母音音素

	前舌	後舌
狭	i	u
半狭	e	o
広		a

表 3. 子音音素

	両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	p, b	t, d		k, g	
摩擦音		s, z			h
鼻音	m	n			
はじき音		r			
接近音	w		y		

3.1.1. 母音

/i/は[i]として実現する。

(4) a. /kizi/ [kʲiʑi]「雉」
b. /osidasi/ [oɕidɑɕi]「押し出し」

/e/は[e]として実現する。

(5) a. /kenka/ [keŋkɑ]「喧嘩」
b. /kome/ [kome]「米」

/u/は[ɥ]として実現する。

(6) a. /ayu/ [ɑjɥ]「鮎」
b. /onzu/ [oʒ̃zɥ]「カブトムシ」

/o/は[o]として実現する。

(7) a. /koma/ [komɑ]「独楽」
b. /obatake/ [obɑtɑke]「小畑（地名）」

/a/は[ɑ]として実現する。

(8) a. /yama/ [jɑmɑ]「山」
b. /byanbyan/ [bjɑmβjɑɴ]「びゃんびゃん（擬音語）」

3.1.2. 母音の連続

3.1.2.1. 長母音

長母音は/ii/，/ee/，/uu/，/oo/，/aa/があり，/i/については，長母音と短母音のミニマルペアが確認できている。これらの長母音は，すべて短母音の連続であるとする。これは，基底形では長母音ではなく短母音の連続であったものが，表層において長母音として現れていると分析するためである[3]。

---

[3] 同様の分析が，福岡県柳川市方言の文法を記述した松岡（2021），宮崎県東臼杵郡椎葉村尾前方言の音素論と形態音韻論を記述した下地（2016）においてもなされている。

(9) a. /niizi/ [niːzi]「脱いで」
cf. /nizi/ [nizi]「虹」
b. /hutee/ [ɸuteː]「大きい」
c. /nantyuuya/ [nɑntʃu̞ːjɑ]「何と言うか」
d. /zyoozu/ [zʲjoːzu̞]「上手」
e. /nyaa/ [ɲɑː]「無い」

3.1.2.2. 二重母音

確認できている二重母音は，/ae/，/ai/，/au/，/ei/，/ue/，/ui/，/oi/である。これらの母音連続では，ピッチの上昇が確認されなかった。母音連続のうち，V_2 が V_1 に対して常に，より狭い母音になることが分かる。

(10) a. /mae/ [mɑe]「前」
b. /kaidan/ [kɑidɑɴ] 「階段」
c. /tigau/ [tʃîɣɑu̞]「違う」
d. /keiko/ [keiko]「稽古」
e. /ue/ [u̞e]「上」
f. /kaisuiyoku/ [kɑisu̞ijokɯ̞]「海水浴」
g. /hoippyaa/ [hoippjɑː]「たくさん」

rokuon「録音」，asukeoru「あそこに居る」のように，/uo/，/eo/の母音連続も確認されたが，これらではピッチが上昇していたため，音節を跨いでいると判断する。

3.1.3. 子音

3.1.3.1. 単子音

/p/は[p]として実現する。

(11) a. /sinpai/ [ɕimpɑi]「心配」
b. /koppu/ [koppu̞]「コップ」

/b/は，語頭では[b]として実現し，語中では[β]として実現する。

(12) a. /battari/ [bɑttɑɾi]「（ホオジロを捕まえるための」仕掛け」
b. /mitubati/ [mitsu̞βɑtʃi]「蜜蜂」

/t/は/a/，/e/，/o/の前では[t]，/i/，/y/の前では[tʃ]，/u/の前では[ts]。として実現する。[4]

(13) a. /atti/ [ɑttʃì]「あっち」
b. /tukutte/ [tsu̞ku̞tte]「作って」

/d/は/a/，/e/，/o/が後続して，[d]として実現する。

(14) a. /dekasegu/ [dekɑɕeɣu]「出稼ぐ」
b. /odori/ [odoɾi]「踊り」

/k/は/i/，/y/の前では[kʲ]として実現し，それ以外の環境では[k]として実現する。

(15) a. /kyaanuru/ [kʲjɑːnu̞ɾu̞]「寝る」
b. /kakurega/ [kɑku̞ɾeɣɑ]「隠れ家」

/g/は語頭では[g]，それ以外の環境では[ɣ]として実現する。

(16) a. /dagobati/ [dɑɣoβɑtʃì]「スズメバチ」
b. /gonensee/ [goneɴɕeː]「五年生」

/s/は/i/，/y/，/e/の前では[ɕ]，それ以外の環境では[s]として実現する。

(17) a. /senaka/ [ɕenɑkɑ]「背中」
b. /suu/ [su̞ː]「巣」

/z/は/i/，/y/の前では[zʲ]，それ以外の環境では[z]として実現する。

(18) a. /zyoozu/ [zʲjoːzu̞]「上手」
b. /ziisan/ [zʲiːsɑɴ]「おじいさん」

---

[4] 長崎県五島列島宇久島野方方言の文法を記述した中村（2019:31）では，音素として t の他に ʈ[tʲ]が設定される。菊鹿方言でも，KK 氏への調査における発話の中で/tataatarya/ [tɑtʲɑːtɑɾja]「叩いたら」が出てきたが，改めて聞き返すと/tatyaatarya/ [tɑtʃɑːtɑɾjɑ]との回答を得たため，本論文では音素として設定しない。

/h/は/a/，/e/，/o/の前では[h]，/i/，/y/の前では[ç]，/u/の前では[ɸ]として実現する。

(19) a. /hutee/ [ɸu̥teː]「大きい」
b. /hyaatte/ [çjɑːtte]「入って」

/m/は/i/，/y/の前では[mʲ]，それ以外の環境では[m]として実現する。

(20) a. myoo [mʲjoː]「妙」
b. kome [kome]「米」

/n/は，音節構造の頭子音に立つとき，/i/，/y/の前では[ɲ]，それ以外の環境では[n]として実現する。

(21) a. ueni [ueɲi]「上に」
b. kanaami [kɑnɑːmʲi]「金網」

/n/が音節構造の尾子音に立つとき，後続する分節音が歯茎音（摩擦音を除く）の場合には[n]，軟口蓋音の場合には[ŋ]，両唇音の場合には[m]，母音，摩擦音の場合には鼻母音として実現し，/n/が語末に立つ場合には[ɴ]として実現する。

(22) a. nantyuuya [nɑntʃuːjɑ]「何と言うか」
b. zyanken [zʲjɑŋkeɴ]「じゃんけん」
c. tyanbara [tʃɑmβɑɾɑ]「チャンバラ」
d. denhatake [deĩhɑtɑke]「土井畑」
e. yakan [jɑkɑɴ]「やかん」

/r/は[ɾ]として実現する。

(23) a. /rokuon/ [ɾokṵoɴ]「録音」
b. /ryoo/ [ɾjoː]「寮」

/w/は[w]として実現する。/a/，/y/が後続する。その他の要素の後続も認めるかどうか，今後検証が必要である。

(24) a. /kuwabaru/ [kɯ̥̞wɑβɑɾɯ̥][5]「桑原（地名）」

b. /hawyati/ [hɑwjɑtʃi]「掃いて」

/y/は[j]として実現する。

(25) a. /yakan/ [jɑkɑɴ]「やかん」

b. /yokatta/ [jokɑttɑ]「良かった」

3.1.3.2. 重子音

確認できている重子音は，/pp/，/tt/，/kk/，/gg/，/dd/，/nn/，/ss/，/zz/である。これらの子音の連続は全て単子音の持続時間が長いもの，つまり単子音の連続であると分析する。

(26) a. /hoippyaa/ [hoippjɑː]「たくさん」

b. /battari/ [bɑttɑɾi]「（ホオジロを捕まえるための）仕掛け」

c. /sodde/ [sodde]「それで」

d. /syoogakkoo/ [ɕoːɣɑkkoː]「小学校」

e. /koggyan/ [koɣɣɑɴ]「こんなに」

f. /tonanno/ [tonɑnno]「隣の」

g. /assage/ [ɑssɑge]「竹馬」

h. /dozzibooru/ [dozziβoːɾɯ̥]「ドッジボール」

3.2. 音節構造・音素配列

菊鹿方言の音節構造とモーラの対応を以下に示す。

(27) 1 音節内…（C_1 （G）） V_1 （V_2） （C_2）

μ μ μ

音素配列を以下に示す。

表 4. 音素配列

C_1	全ての子音音素が立つ。
G	y が立つ。 ただし，C_1 が y，ʈ，ɖ の場合は，G には何も立たない。

[5] 会話の中で，この[ɯ̥]は無声化してほとんど聞こえない。

V_1	全ての母音音素が立つ。
V_2	V_1と同じ母音音素，あるいはV_1によって特定の母音音素が立つ。 （V_1V_2が異なる母音となる場合に成り立つ母音連続は，/ae/，/ai/，/au/，/ei/，/ue/，/ui/，/oi/のようなものがある。）[6]
C2	語末では n，r が立つ。それ以外では p, b, t, d, k, g, s, z も立つ。

(27)に示した音節構造の具体例を，以下に示す。$C_1V_1V_2C_2$の組み合わせも生じる可能性があるが，未検証である。

(28)	a.	V_1	/a.me/「雨」
	b.	V_1V_2	/ai.tyan/「愛ちゃん」
	c.	V_1C_2	/as.sa.ge/「竹馬」
	d.	V_1V_2 C_2	/eet.to/「えっと」
	e.	C_1V_1	/me.zi.ro/「めじろ」
	f.	$C_1V_1V_2$	/yuu.ti.kan.ne/「言ってね」
	g.	$C_1V_1C_2$	/ka.kat.to.ru/「かかっている」
	h.	C_1GV_1	/te.tya/「とは」
	i.	$C_1GV_1V_2$	/nyaa.bat.ten/「ないけど」
	j.	$C_1GV_1V_2C_2$	/hyaat.te/「入って」
	k.	$C_1GV_1C_2$	/do.gyan/「どのように」

上村（1983）によれば，九州方言において合拗音（例: /kwazi/ [kwazi]「火事」，/syoogatu/ [ɕoːgwatsu̥]「正月」）が見られることがあるとのことだが，今回対象とした話者には，合拗音はみられなかった[7]。

3.3. 主要な音韻規則

本節では動詞屈折形態論を記述する上での主要な形態音韻規則を記述する。

3.3.1. 母音融合規則

動詞語幹に接辞が接続する際に，母音融合が生じる。

---

[6] 3.2.2.2 項参照。

[7] KK 氏（話者情報は 4.1 節にて詳述）によれば，「/kwa/や/gwa/はあまり聞いたことがない」とのこと。

(29) a. ai → yaa（//yak-ta// → yai-ta → /yaata/「焼いた」）

b. au → oo （//kaw-ta// → kau-ta → /koota/「買った」）

c. iu → yuu （//iw-ta// → iu-ta → /yuuta/「言った」）

d. ui → ii （//muk-ta// → mui-ta → /miita/「剝いた」）

e. eu → yuu （//ake-u// → /akyuu/「開けよう」）

f. oi → ee （//tog-ta// → tog-da → toi-da → /teeda/「砥いだ」）

g. ou → oo （//yow-ta// → you-ta → /yoota/「酔った」）

3.3.2. 接辞の初頭音/r/削除

/r/が初めにある接辞が，末尾が子音の動詞の語幹に後続したとき，接辞の初頭音/r/が削除される[8]。

(30) 基底形 ： //kak-runa//

↓接辞の初頭音/r/削除規則

kak-una

↓

出力形 ： /kakuna/

3.3.3. 音節/ru/の鼻音化

音節/ru/に/n/が後続する場合，音節/ru/が鼻音化する[9]。

(31) 基底形 ： //hasir-runa//

↓接辞の初頭音/r/削除規則

hasir-una

↓

hasiruna

↓音節/ru/の鼻音化

出力形 ： /hasinna/

---

[8] 同様の規則の適用が，中村（2019: 31），松岡（2021: 42）にも見られる。

[9] 松岡（2021: 11）において，「r と狭母音からなる音節の鼻音化」という規則が挙げられている。菊鹿方言において/ri/に/n/が後続する場合にも音節の鼻音化が起こるかどうかは，検証が必要である。

(32)　基底形：　//mi-runa//

↓

miruna

↓音節/ru/の鼻音化

出力形：　/minna/

3.3.4.　語幹末分節音/r/の同化

語幹末分節音が/r/の動詞語幹に/t/で始まる接辞が後続する時，語幹末分節音/r/は/t/に同化する。

(33)　kir-ta → kit-ta → kitta「切った」

3.4.その他の音韻的特徴

本節では，3.4 節で示した以外の菊鹿方言における音韻的特徴を記述する。

3.4.1.　語末の狭母音の無声化

語末において，狭母音が無声化することがある。

(34)　a.　atti [ɑttʃi̥]「あっち」

b.　kotu [kotsu̥]「こと」

語末における狭母音[i] [u]の無声化は九州において広く行われる。ただし，濁音の場合の狭母音の無声化は，肥筑方言を含む九州北部では普通でない。（上村 1983: 9）

菊鹿方言において語末音節の頭子音が濁音，つまり有声音である場合に，語末母音の無声化に違いが出るかどうかについては今後確認が必要である。しかし，菊鹿方言における継起副動詞形（5 章にて詳述）では，以下のような発話を示す。

(35)　a.　oozi [oːzʲi̥]「編んで」

b.　kyaati [kʲjaːi̥]「書いて」

このように，継起副動詞形においては，語末音節の頭子音が有声音である場合に語末母音が無声化する例が散見される。少なくとも継起副動詞形では語末母音の無声化は任意のもので，語末音節の頭子音が有声音であるかどうかは関係しないと考えられる。

3.4.2. 非過去肯定接辞に含まれる/u/の無声化

非過去肯定接辞 -ru（4.3 節で詳述）が動詞語幹に後続した非過去肯定形が句末に来る場合，接辞に含まれる/u/が脱落することがある。

(36) a. kak [kɑk]「書く」
b. kir [kiɾ]「切る」
c. mir [miɾ]「見る」
d. der[deɾ]「出る」

3.5.1 項で述べたように，菊鹿方言では語末母音が無声化する傾向にあるが，非過去肯定形の語末母音の脱落は，無声化が顕著に現れた結果であると推測する。

3.5. 屈折と派生

本論文が考察対象とするのは動詞の「屈折」である。「屈折」はある概念的区別によって引き起こされる，語彙素を実現するための形態変化である（長屋 2015: 54 より筆者一部変更）。屈折が引き起こされる概念的区別は言語個別的である。

似たような形態変化で「派生」というものがある。派生とは，ある語彙素から新たな語彙素を形成する形態変化である（長屋 2015: 54 より筆者一部変更）。

屈折と派生の区別は容易ではないが，本論文では Haspelmath and Sims（2010: 90）が取り上げる屈折と派生の具体的な特徴を基に，屈折と派生を区別する。

表 5. 屈折と派生の特徴（Haspelmath and Sims 2010: 90 より，訳は渡辺 2014: 24 による）

	屈折	派生
(i)	relevant to the syntax (統語法への関連がある)	not relevant to the syntax (統語法への関連がない)
(ii)	obligatory expression of feature (義務的表示)	not obligatory expression (義務的ではない)
(iii)	unlimited applicability (適用の制限なし)	possibly limited applicability (適用の制限あり)
(iv)	same concept as base (語基と同じ概念)	new concept (新たな概念)
(v)	relatively abstract meaning (抽象的意味)	relatively concrete meaning (具体的意味)
(vi)	compositional meaning (意味の合算性)	possibly non-compositional meaning (意味の非合算性)
(vii)	expression at word periphery (語の周辺部に位置)	expression close to the base (語基に近い位置)
(viii)	less base allomorphy (語基の異形態がより少ない)	more base allomorphy (語基の異形態がより多い)
(ix)	no change of word-class (語類の変化なし)	sometimes changes word-class (語類の変化を起こすことがある)
(x)	cumulative expression possible (累積的表現あり)	no cumulative expression (累積的なものはほとんどない)
(xi)	not iterable (反復性がない)	possibly iterable (反復されることがある)

3.6. 語根・語幹・語基

語根・語基・語幹の定義を以下に示す。

(37) a. 語根 ： 具体的な意味を有しそれ以上分割できない単位。
b. 語基 ： 接辞の入力元となる単位。
c. 語幹 ： 語から屈折接辞を取り除いた単位。

語根・語基・語幹の対応関係を，akesasuru「開けさせる」を例にして示す。

表 6. 語根・語基・語幹の対応関係（例 : akesasuru「開けさせる」）

	派生接辞	屈折接辞
ake	-sasu	-ru
語根	接辞	接辞
-sasu の語基		
-ru の語基		
語幹		屈折接辞

3.7. 例文の提示

次章以降，本論文における例文提示においては，1 段目に表層，2 段目に基底，3 段目に基底の形態素ごとのグロス，4 段目に例文全体の訳を示す標準 4 段方式（下地 2020）を用いる。

(38) *asiba* *kuziti* *simota.*
asi=ba kuzik-te simaw-ta
足=ACC 挫く-SEQ MPRF-PST
「足を挫いてしまった。」

[筆者作例]

なお，例文の形態素に付されるグロスは「下地理則の研究室・方言グロスリスト[10]」を用いる。

4. 菊鹿方言の動詞屈折形態論

4.1. 調査

本論文では，2021 年 5 月から 12 月の間に筆者が行った質問票調査のデータと 2021 年 7 月に行った自然談話調査のデータを用いる。質問票調査作成に際し，国立国語研究所が主催した隠岐島方言合同調査に際して平子達也氏が作成した用言調査票の例文，福岡県柳川市方言の文法を記述した松岡（2021）において動詞が屈折を起こす文法範疇として記述されていた項目を参照した。質問項目があらかじめ決まっている質問票調査を補完するために，実際の談話で生じる想定外の語形などを観察するため，自然談話調査も行なった。なお，質問調査で収集した例には，筆者（菊鹿方言若年層話者）の内省をもとに，話者に容

[10]「下地理則の研究室・方言グロスリスト」 https://docs.google.com/spreadsheets/d/14wKM61WaLz34-Dcj3Q_vFUmrwqu5Do7VeQu-It8wZVU/edit?usp=sharing （2022 年 1 月 6 日最終閲覧）

認できるかを確認したものも含む。話者情報を以下に示す。

表 7. 話者情報

話者	TH 氏	KK 氏	TI 氏
性別	男性	男性	女性
外住歴	1 年 （20 代前半，愛知）	2 年 （10 代後半，鹿児島）	半年 （10 代後半， 旧鹿本郡植木町）
調査形式	自然談話調査	質問調査	質問調査

以下に，調査項目を示す。尚，動詞によってはこれ以外に「過去否定」「推量」「非過去否定（取り立て）」「使役」「受身」「可能」「動作継続」「結果継続」についても調査したものがあるが，これらは調査の初期段階で屈折を起こさないと判断し，それ以降の動詞においては調査を行っていない。

表 8. 屈折形態調査項目

環境	
文終止・名詞修飾	非過去肯定・否定
	過去肯定
	非過去義務
	過去義務
文終止	意志
	勧誘
	命令
	禁止
副詞節	中止肯定・否定
	条件
	並列
	目的

4.2.動詞の語幹クラス

動詞語幹は子音語幹・母音語幹・変格活用語幹に分けられる。

表 9. 動詞の語幹クラスと動詞の例

子音語幹	b 語幹	yob- 「呼ぶ」 , asob- 「遊ぶ」
	m 語幹	am- 「編む」 , hasam- 「挟む」
	w 語幹	kaw- 「買う」 , yasinaw- 「育てる」
	s 語幹	hos- 「干す」 , tobas- 「飛ばす」
	t 語幹	mat- 「待つ」 ,mot- 「持つ」
	n 語幹	sin- 「死ぬ」
	r 語幹	war- 「割る」 , yabur- 「破る」
	k 語幹	yak- 「焼く」 , harikak- 「怒る」
	g 語幹	nug- 「脱ぐ」 , isog- 「急ぐ」
母音語幹	i 語幹	ki- 「着る」 , oki- 「起きる」
	e/u 語幹	de/zu- 「出る」 , ne/nu- 「寝る」
変格活用語幹		ko/ki/ku- 「来る」
		se/si/su- 「する」

4.2.1. 子音語幹動詞

子音語幹動詞は，語幹末の音素によって，b 語幹，m 語幹，w 語幹，s 語幹，t 語幹，n 語幹，r 語幹，k 語幹，g 語幹にさらに分類される。

子音語幹動詞に接辞が後続する時には，動詞語幹そのままの形（例 : hasir-「走る」，kaw-「買う」），いわゆる非拡張語幹に後続する場合と，語幹を拡張する語幹拡張母音（thematic vowels; Bickel and Nichols 2007）を必要とする場合とがある。どのような語幹拡張母音を設定するかは，方言の共時的なデータに依る（宮岡 2021: 9）。

菊鹿方言では，非拡張語幹に接続する場合と a 拡張語幹に接続する場合，そして i 拡張語幹に接続する場合を設定する。以下に，k 語幹動詞 kak-「書く」を用いて例を示す。

(39) *kaku*
kak-ru
書く-NPST
「書く」

(40) *kakan*
kak-a-n
書く-THM-NEG
「書かない」

(41) *kakiyotta*

kak-i-yor-ta

書く-THM-PROG-PST

「書いていた」

どの屈折形態において語幹拡張母音を必要とするかについては 4.3 節以降で詳述する。

4.2.2. 母音語幹動詞

母音語幹動詞は，語幹末が母音で終わる動詞で，語幹末が i の i 語幹，e と u が交替する e/u 語幹に分けられる。接辞が後続する時, 必ず非拡張語幹に接続するが, 接辞によっては, r 語幹化した a 拡張語幹に接続することがある。r 語幹化については 4.2.4 項にて後述する。

4.2.3. 変格活用語幹動詞

変格活用語幹動詞は，子音語幹動詞にも母音語幹動詞にも分類されない，特異な振る舞いを見せる動詞で，「来る」「する」が属する。後続する接辞によって，語幹の形が異なる。それぞれの語幹の振る舞いの例を以下に示す。

表 10. 変格活用語幹の振る舞いの例

後続する接辞	「来る」の語幹	「する」の語幹
-ru, -runa	ku-	su-
-ta, -u, -te, -tari, -tara/-tarya, -gya	ki-	si-
-n, -nyan, -i. -nde/-dena	ko-	se-

4.2.4. 母音語幹動詞の r 語幹化

r 語幹化（ラ行五段化）とは，「現代日本語諸方言において，母音語幹（i 語幹・e 語幹・i/u 語幹・e/u 語幹）動詞が子音 r 語幹（ラ行五段）動詞と同じ形態論的振る舞いをする」ようになる通時的現象のことをいう（宮岡 2021: 1）。菊鹿方言でも，後続する接辞によってはこの現象が見られることがある。以下に，i 語幹が r 語幹化している例を示す。

(42) *miran*

mi<u>r</u>-a-n

見る-THM- NEG

「見ない」

mi-「見る」という母音語幹動詞は本来語幹末分節音が/i/の動詞だが，非過去否定接辞-n（4.3.1.3 項に詳述）が後続する場合には表層が/min/，/miran/の二形式で現れる。これは，非過去否定接辞が接続する場合には，語幹末分節音が r となり，r 語幹動詞に非過去否定接辞が後続する場合と同様に，語幹拡張母音が必要とされた結果であると考えられる。

菊鹿方言において r 語幹化する母音語幹動詞は，i 語幹動詞と 1 モーラの e/u 語幹動詞であり，非過去否定接辞，義務接辞，意志接辞，否定継起接辞が後続する場合に起きる。2 モーラ以上の e/u 語幹動詞では，どのような環境でも r 語幹化しない。

4.3. 屈折接辞

動詞語幹がとる屈折接辞を示す。表 11 に，屈折接辞とその出現する環境を示す。なお，便宜上，動詞に後続するコピュラが文法的な範疇を担う場合も同時に示す。

表 11. 動詞のパラダイム

環境	法		肯定	否定
文終止・名詞修飾	直説法	非過去	-ru	-n
		過去	-ta	-n=zyar-ta
	義務法	非過去	-nyan	
		過去	-nyan=zyar-ta	
文終止	意志法		-u	
	命令法		-re/-i	-runa
副詞節		継起	-te	-nde/-dena
		条件	-tara/-tarya	
		並列	-tari	
		目的	-gya	

4.3.1. 直説法

4.3.1.1. 非過去肯定

非過去肯定接辞-ru「～する」が子音語幹に接続する時，非拡張語幹に接続し，接辞の頭子音 r が脱落する。母音語幹に接続する時，i 語幹の場合は非拡張語幹に接続し，e/u 語幹の場合は u 語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ku-に，「する」の場合は su-にそれぞれ接続する。

非過去肯定接辞-ru が子音語幹動詞に後続する場合には，3.3.2 項「接辞の初頭音/r/削除」規則が適用される。

表 12. 非過去肯定接辞-ru

子音語幹		//yob-ru//→/yobu/	「呼ぶ」
母音語幹	i 語幹	//mi-ru//→/miru/	「見る」
	e/u 語幹	//nu-ru//→/nuru/	「寝る」
変格活用語幹		//ku-ru//→/kuru/	「来る」
		//su-ru//→/suru/	「する」

4.3.1.2. 過去肯定

過去肯定接辞-ta「～した」が子音語幹に接続する時，非拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時, i 語幹ならば非拡張語幹に接続し, e/u 語幹ならば非拡張 e 語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ki-に，「する」の場合は si-にそれぞれ接続する。過去肯定接辞-ta が r 語幹動詞に後続する場合には，3.3.4 項「語幹末分節音/r/の同化」規則が適用される。

表 13. 過去肯定接辞-ta

子音語幹		//hasir-ta//→/hasitta/	「走った」
母音語幹	i 語幹	//mi-ta//→/mita/	「見た」
	e/u 語幹	//ne-ta//→/neta/	「寝た」
変格活用語幹		//ki-ta//→/kita/	「来た」
		//si-ta//→/sita/	「した」

過去接辞が子音語幹動詞に後続する時，語幹末分節音によっては，語幹末分節音の母音との交替が起き，その後母音融合が起こる。この規則は，5.5.1 項で後述する継起副動詞形において適用される形態音韻規則と同じである。同様の音韻変化が，条件接辞-tara/-tarya, 並列接辞-tari が接続した場合にも起こる。

4.3.1.3. 非過去否定

非過去否定接辞-n「～しない」が子音語幹に接続する時，a 拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹または r 語幹化して a 拡張した語幹に接続する。e/u 語幹ならば e 非拡張語幹または r 語幹化して a 拡張した語幹に接続する。尚，e/u 語幹で語幹が 2 モーラ以上の動詞の場合には，必ず非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ko-，「する」の場合は se-にそれぞれ接続する。

表 14. 非過去否定接辞-n

子音語幹		//hasir-a-n//→/hasiran/	「走らない」
母音語幹	i 語幹	//ki-n//→/kin/ //kir-a-n//→/kiran/	「着ない」
	e/u 語幹	//ne-n//→/nen/ //ner-a-n//→/neran/	「寝ない」
		//ake-n//→/aken/	「開けない」
変格活用語幹		//ko-n//→/kon/	「来ない」
		//se-n//→/sen/	「しない」

過去否定は，非過去否定接辞-n で屈折した後，/zyatta/を付けて表す。このことから菊鹿方言ではコピュラ動詞=zyar が存在し，過去否定を表す場合にはコピュラ動詞がテンスを表す役割を担うと考えられる[11]。過去否定形の表層では，非過去否定接辞が削除されることもある。

(43) *{hasiranzyatta/ hasirazyatta}*
hasir-a-n=zyar-ta
走る-THM-NEG=COP-PST
「走らなかった。」

4.3.2. 義務法

義務接辞-nyan「～しなければならない」が子音語幹に接続する時，a 拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹または r 語幹化して a 拡張した語幹に接続する。尚，e/u 語幹で語幹が 2 モーラ以上の動詞の場合には，必ず非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ko-，「する」の場合は se-にそれぞれ接続する。

[11] コピュラ動詞=zyar が，動詞に後続してどのような文法範疇を示すかについては今後調査が必要である。過去否定が/zyatta/の後続によって表される地域は九州で広く見られる（「方言文法全国地図」国立国語研究所 第 4 集 151 図〔https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-map-legend/vol4/GAJ4-151.pdf〕2022 年 1 月 6 日最終閲覧）。

表 15. 義務接辞-nyan

子音語幹		//hasir-a-nyan//→/hasiranyan/	「走らなければならない」
母音語幹	i 語幹	//mi-nyan//→/mi-nyan/ //mir-a-nyan//→/miranyan/	「見なければならない」
	e/u 語幹	//ne-nyan//→/nenyan/ //ner-a-nyan//→/neranyan/	「寝なければならない」
		//ake-nyan//→/akenyan/	「開けなければならない」
変格活用語幹		//ko-nyan//→/konyan/	「来なければならない」
		//se-nyan//→/senyan/	「しなければならない」

「～しなければならない」は~ntoikan のように分析的な表現をなされることがある。

(44) *sigotuba* *sento* *ikan.*
sigotu=ba se-nto ik-a-n
仕事=ACC する-NEG.CND 行く-THM-NEG
「仕事をしなければならない。」

義務法の過去「～しなければならなかった」を表す場合，コピュラ動詞=zyar が後続してテンスを表す。

(45) *sobba* *kawanyanzyatta*
sore=ba kaw-a-nyan=zyatta
DEM=ACC 買う-THM-OBL=PST
「それを買わなければならなかった。」

4.3.3. 意志法

意志接辞-u が子音語幹に接続する時，a 拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹または r 語幹化して a 拡張した語幹に接続し，e/u 語幹ならば，1 モーラ語幹の場合は非拡張語幹または r 語幹化して a 拡張した語幹に接続し，2 モーラ以上の語幹の場合は e 非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ki-，「する」の場合は si-にそれぞれ接続する。

表 16. 意志接辞-u

子音語幹		//hasir-a-u//→/hasiroo/	「走ろう」
母音語幹	i 語幹	//mi-u//→/myuu/ //mir-a-u//→/miroo/	「見よう」
	e/u 語幹	//ne-u//→/nyuu/ //ner-a-u//→/neroo/	「寝よう」
変格活用語幹		//ki-u//→/kyuu/	「来よう」
		//si-u//→/syuu/	「しよう」

意志形の語末音節の長母音は，語幹のモーラ数に関わらず基本的に短音化を起こす。丁寧に発話しようとすると長音で発話される。

(46) *kyoowa* *moo* *nyu.*
kyoo=wa moo ne-u
今日=TOP もう 寝る-INT
「今日はもう寝よう。」

尚，意志法で屈折した後に=i が後続すると勧誘を表す。勧誘形における長母音の短音化も任意のものである。意志形・勧誘形における長母音の短音化については，今後詳細な調査を行い，その規則性を見つけることが課題である。

(47) *mesiba* *kuoi.*
mesi=ba kuw-a-u=i
ご飯=ACC 食べる-THM-INT=HORT
「ご飯を食べよう。」

4.3.4. 命令法

4.3.4.1. 命令

命令接辞「～しろ」には，-re と-i がある。

-re は子音語幹と母音語幹に接続する。子音語幹に接続する時，非拡張語幹に接続し，接辞の頭子音 r が脱落する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹に接続する。e/u 語幹ならば e 非拡張語幹に接続する。-re が子音語幹動詞に後続する場合には，3.3.2 項「接辞の初頭音/r/削除」規則が適用される。

i は e/u 語幹と変格活用語幹に接続する。e/u 語幹に接続する時，e 非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ko-，「する」の場合は se-に接続する。

表 17. 命令接辞-re/-i

子音語幹		//hasir-re//→/hasire/	「走れ」
母音語幹	i 語幹	//mi-re//→/mire/	「見ろ」
	e/u 語幹	//ne-re//→/nere/ //ne-i//→/nee/	「寝ろ」
変格活用語幹		//ko-i//→/kee/	「来い」
		//se-i//→/see/	「しろ」

4.3.4.2. 禁止

禁止接辞-runa「～するな」が子音語幹に接続する時，非拡張語幹に接続し，接辞の頭子音 r が脱落する。母音語幹に接続する時，i 語幹，e 語幹ならば，非拡張語幹に接続し，e/u 語幹ならば e 非拡張語幹にも u 非拡張語幹にも接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合 ku-，「する」の場合 su-にそれぞれ接続する。

禁止接辞-runa が子音語幹動詞に後続する場合には，3.3.2 項「接辞の初頭音/r/削除」規則が適用される。r 語幹動詞に後続する場合には，出力の直前で 3.3.3 項「音節/ru/の鼻音化」規則が適用される。

表 18. 禁止接辞-runa

子音語幹		//hasir-runa//→/hasinna/	「走るな」
母音語幹	i 語幹	//mi-runa//→/minna/	「見るな」
	e/u 語幹	//ne-runa//→/neruna/ //nu-runa//→/nunna/	「寝るな」
変格活用語幹		//ku-runa//→/kunna/	「来るな」
		//su-runa//→/sunna/	「するな」

4.3.5. 副動詞

4.3.5.1. 肯定継起

肯定継起副動詞接辞-te「～して」が子音語幹に接続する時，主に非拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹に接続し，e/u 語幹ならば e 非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ki-，「する」の場合は si-にそれぞれ接続する。肯定継起副動詞接辞は，語幹末分節音によってその現れ方に違いがあり，/te/，/ti/，/de/，/zi/のように現れる。詳細は 5 章にて後述する。

表 19. 肯定継起接辞-te

子音語幹		//hasir-te//→/hasitte/	「走って」
母音語幹	i 語幹	//ki-te//→/kite/	「着て」
	e/u 語幹	//ne-te//→/nete/	「寝て」
変格活用語幹		//ki-te//→/kite/	「来て」
		//si-te//→/site/	「して」

肯定継起副動詞形は，文終止の環境で願望を表す。

(48) *madoba* *aketi.*
mado=ba ake-ti
窓=ACC 開ける-SEQ
「窓を開けて。」

(49) *tarooba* *yoozi.*
taroo=ba yob-te
太郎=ACC 呼ぶ-SEQ
「太郎を読んで。」

これについては，通時的な分析にはなるが，本来/aketikure/「開けてくれ」，/aketihaiyo/「開けてください」のように，継起副動詞形に補助動詞の命令形や願望の意味を担う要素が後続していたものが省略され，継起副動詞形のみでも願望を表すようになったものであると推測する。

4.3.5.2. 否定継起

否定継起副動詞接辞-nde/-dena/-denya「～しないで」が子音語幹に接続する時，a 拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹または r 語幹化して a 拡張した語幹に接続する。e/u 語幹ならば e 非拡張語幹または r 語幹化して a 拡張した語幹に接続する。尚，e/u 語幹で語幹が 2 モーラ以上の動詞の場合には，必ず非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ko-に，「する」の場合は se-にそれぞれ接続する。

表 20. 否定継起接辞-nde/-dena/-denya

子音語幹		//kaw-a-nde//→/kawande/	「買わないで」
母音語幹	i 語幹	//ki-nde//→/kinde/ //kir-a-nde//→/kirande/	「着ないで」
	e/u 語幹	//ne-nde//→/nende/ //ner-a-nde//→/nerande/	「寝ないで」
		//ake-nde//→/ake-nde/	「開けないで」
変格活用語幹		//ko-nde//→/konde/	「来ないで」
		//se-nde//→/sende/	「しないで」

否定継起副動詞形も文終止の環境で願望を表す。しかし，この場合には-dena/-denya は用いられず，-nde のみ容認される。

(50) *rookaba* *hasirande.*
rooka=ba hasir-a-nde
廊下=ACC 走る-THM-SEQ.NEG
「廊下を走らないで。」

4.3.5.3. 条件

肯定条件副動詞接辞-tara/-tarya「～すれば」が子音語幹に接続する時，非拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹に接続する。e/u 語幹ならば e 非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ki-に，「する」の場合は si-にそれぞれ接続する。

肯定条件副動詞接辞-tara/-tarya が r 語幹動詞に後続する場合には，3.3.4 項「語幹末分節音/r/の同化」規則が適用される。

表 21. 条件接辞-tara/-tarya

子音語幹		//hasir-tara//→/hasittara/	「走れば」
母音語幹	i 語幹	//mi-tara//→/mitara/	「見れば」
	e/u 語幹	//ne-tara//→/netara/	「寝れば」
変格活用語幹		//ki-tara//→/kitara/	「来れば」
		//si-tara//→/sitara/	「しれば」

条件接辞が子音語幹に接続する時，語幹末分節音によっては，語幹末分節音の母音との

交替が起き，その後母音融合が起こる。この規則は，5.5.1 項にて後述する継起副動詞形において適用される形態音韻規則と同じである。

条件「～すれば」には，以下のような形もある。

(51)	tyanto	sigotuba	sunnara,	kanen	morayuzzo.
	tyanto	sigotu=ba	su-ru=nara	kane=no	moraw-yur-ru=zo
	ちゃんと	仕事=ACC	する-NPST=CND	金=NOM	もらう-POT-NPST=EMP
	「ちゃんと仕事をすれば，金がもらえるよ。」				

同様の文脈で，次のような形でも表すことができる。

(52)	*tyanto*	*sigotuba*	*sitanara,*	*kanen*	*morayuzzo.*
	tyanto	sigotu=ba	si-ta=nara	kane=no	moraw-yur-ru=zo
	ちゃんと	仕事=ACC	する-PST=CND	金=NOM	もらう-POT-NPST=EMP
	「ちゃんと仕事をすれば，金がもらえるよ。」				

(53)	*tyanto*	*sigotuba*	*sutto,*	*kanen*	*morayuzzo.*
	tyanto	sigotu=ba	su-ru=to	kane=no	moraw-yur-ru=zo
	ちゃんと	仕事=ACC	する-NPST=CND	金=NOM	もらう-POT-NPST=EMP
	「ちゃんと仕事をすれば，金がもらえるよ。」				

同様の文脈で，以下のような形ではより確かな条件を表す。

(54)	*tyanto*	*sigotuba*	*suttosyaga*	*kanen*	*morayuzzo.*
	tyanto	sigotu=ba	su-ru=tosyaga	kane=no	moraw-yur-ru=zo
	ちゃんと	仕事=ACC	する-PST=CND	金=NOM	もらう-POT-NPST=EMP
	「ちゃんと仕事をすれば，金がもらえるよ。」				

4.3.5.4. 並列

並列副動詞接辞-tari「～したり」が子音語幹に接続する時，非拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹に接続する。e/u 語幹ならば e 非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ki-に，「する」の場合は si-にそれぞれ接続する。並列副動詞接辞-tara/-tarya が r 語幹動詞に後続する場合には，3.3.4 項「語幹末分節音/r/の同化」規則が適用される。

表 22. 並列接辞-tari

子音語幹		//hasir-tari//→/hasittari/	「走ったり」
母音語幹	i 語幹	//mi-tari//→/mitari/	「見たり」
	e/u 語幹	//ne-tari//→/netari/	「寝たり」
変格活用語幹		//ki-tari//→/kitari/	「来たり」
		//si-tari//→/sitari/	「したり」

並列副動詞接辞が子音語幹に接続する時，語幹末分節音によっては，語幹末分節音の母音との交替が起き，その後母音融合が起こる。この規則は，5.5.1 項にて後述する継起副動詞形において適用される形態音韻規則と同じである。

4.3.5.5. 目的

目的副動詞接辞-gya「～しに」が子音語幹に接続する時，i 拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する時，i 語幹ならば非拡張語幹に接続する。e/u 語幹ならば e 非拡張語幹に接続する。変格活用語幹に接続する時，「来る」の場合は ki-に，「する」の場合は si-にそれぞれ接続する。

表 23. 目的接辞-gya

子音語幹		//hasir-i-gya//→/hasirigya/	「走りに」
母音語幹	i 語幹	//mi-gya//→/migya/	「見に」
	e/u 語幹	//ne-gya//→/negya/	「寝に」
変格活用語幹		//ki-gya//→/kigya/	「来に」
		//si-gya//→/sigya/	「しに」

5. 継起副動詞形（いわゆるテ形）の形態音韻交替

5.1.扱う現象について

本章では，菊鹿方言の動詞屈折諸形式のうち，特に形態音韻交替が複雑な継起副動詞（肯定），すなわち標準語の「動詞テ形」に相当する形式について，基底から表層をルールによって導くことで体系的に記述できることを示す。

菊鹿方言の継起副動詞形において特に問題となるのが，継起副動詞接辞//te//の母音交替と，継起副動詞接辞直前の長母音の短音化である。

母音交替に関して，菊鹿方言の継起副動詞接辞の表層形は標準語のように/te/や/de/だけでなく，/ti/や/zi/としても出現する。例えば，asob-「遊ぶ」，harikak-「怒る」の継起副動詞形は以下のように出力される。

(55) *asozi*
asob-te
遊ぶ-SEQ
「遊んで」

(56) *harikyati*
harikak-te
怒る-SEQ
「怒って」

短音化に関して，今挙げた(55)，(56)を見ると，それぞれの基底形と表層形で継起副動詞接辞の前のモーラ数が 1 モーラずつ減少している。これは，以下に示すように，本来長母音が期待される部分で短母音が現れていることによるものであると推測できる。

(57) a. 「遊んで」asob-te ➔ … ➔ asoo-zi ➔ aso-zi ➔ /asozi/
b. 「怒って」harikak-te ➔ … ➔ harikyaa-ti ➔ harikya-ti ➔ /harikyati/

本章では，菊鹿方言の継起副動詞形における形態音韻交替の考察を行い，継起副動詞接辞の母音交替の基準や長母音の短音化の基準について分析する。

5.2. 先行研究

菊鹿方言に関して，その継起副動詞形における上述の形態音韻交替に関する網羅的な記述は存在しない。一方，肥筑方言の継起副動詞形における同種の形態音韻交替を扱った先行研究として，有元（2007, 2012），加藤ほか（2018）がある。以下では，菊鹿方言の継起副動詞形における形態音韻交替を解明する上で，問題となる点について述べる。

5.2.1. 継起副動詞接辞に含まれる母音の交替

継起副動詞形において/te/が/ti/になる現象は，九州において散見される。例えば，有元（2007）において挙げられている，長崎県雲仙市小浜町方言（以下，小浜町方言）がある。

表 24. 小浜町方言のテ形（有元 2007: 137 より，表記方法を筆者一部変更）

子音語幹	b 語幹	[tʃi] （例 : [asoːtʃìkita]「遊んできた」）	
	m 語幹	[tʃi] （例 : [noːtʃìkita]「飲んできた」）	
	w 語幹	[tʃi] （例 : [koːtʃìkita]「買ってきた」）	
	s 語幹	[tʃi] （例 : [kjaːtʃìkita]「貸してきた」）	
	t 語幹	[te] （例 : [kattekita]「勝ってきた」）	
	n 語幹	[de] （例 : [ʃìndemiro]「死んでみろ」）	
	r 語幹	[te] （例 : [tottekita]「取ってきた」）	
	k 語幹	[tʃi] （例 : [kjaːtʃìkita]「書いてきた」）	
	g 語幹	[tʃi] （例 : [ojoːtʃìkita]「泳いできた」）	
母音語幹	i 語幹	1 モーラ	[te] （例 : [mitekita]「見てきた」）
		2 モーラ	[te] （例 : [okittekita]「起きてきた」）
	e 語幹	1 モーラ	[te] （例 : [detekita]「出てきた」）
		2 モーラ	[tʃi] （例 : [ukeːtʃìkita]「受けてきた」）
変格活用語幹		[te] （例 : [kitemireː]「来てみろ」, [ʃìtemireː]「してみろ」）	

語幹にテ形接辞が接続する，という基底からこのような表層を導く過程について，有元（2007）は/te/に相当する部分が/ti/のように現れる形態音韻規則を「テ形接辞 e/i 交替ルール」と仮定して説明している。以下に,「テ形接辞 e/i 交替ルール」と, 小浜町方言の[koːtʃìkita]「買ってきた」における形態音韻規則の適用例を挙げる。

(58) テ形接辞 e/i 交替ルール ：
語幹末分節音が XA でない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合，テ形接辞/te/の/e/を/i/に交替させよ。
XA=/r, t, n/[12]

[有元 2007: 140（3）]

[12] /r, t, n/は非継続的歯音（discontinuant dental）であるという共通点を持っている。（有元 2007: 39）

(59)[13]　基底形：　/kaw+te#ki+ta/

↓テ形接辞 e/i 交替ルール

kaw+ti#ki+ta

↓音便ルール

koo+ti#ki+ta

↓

出力形：　[koːtʃîkita]

[有元 2007: 140（4）]

(58)，(59)に示すように，「テ形接辞 e/i 交替ルール」は，語幹末分節音によって適用されるかが決まるルールである。

このルールを用いて，母音語幹動詞における継起副動詞接辞の使い分けについても同時に説明できるとされている。

表 1 で示したように，母音語幹動詞では，2 モーラの e 語幹動詞でのみ継起副動詞接辞が/ti/として現れ，i 語幹動詞，1 モーラの e 語幹動詞では/te/として現れる。これは，i 語幹動詞，1 モーラの e 語幹動詞はそれぞれ母音語幹ではなく，r 語幹化した r 語幹動詞として振舞っていることによるものである，という。

本来 r 語幹動詞の継起副動詞形では watte「割って」のように促音が現れるはずだが，r 語幹化した母音語幹動詞の場合に促音が現れない理由については，「r 語幹化の/r/は不透明（opaque）である」という規定を立てており，基底形では語幹の/r/は見えず，(58)のルールを参照する時のみ/r/が現れると仮定して解釈している（有元 2007: 43）。

菊鹿方言の継起副動詞接辞の表層形の分布は小浜町方言のものと類似しているが，有元（2007）の分析を適用することができるかどうかについては，調査結果を示したのち，5.4.2 項にて示す。

5.2.2.　長母音の短音化

継起副動詞形において本来長母音が期待される環境で短母音が現れるという現象は，他の九州方言においても見られる。

加藤ほか（2018）は，福岡県八女市黒木方言（以下，黒木方言）の子音語幹動詞の継起副動詞形において，長母音が期待される環境で稀に短母音が出現することに対し，韻脚[14]

---

[13] 記号+は形態素境界（morpheme boundary）を，記号#は単語境界（word boundary）をそれぞれ表す（有元 2007: ｖ）。

[14] 韻脚（フット, foot）とは語内部の韻律範疇で, 日本語では強弱 2 モーラの韻脚を持つ加藤ほか（2018）では，韻脚を語幹内において，語頭から二拍ずつ形成するものとし，韻脚が形成されなかった母音につ

外母音の削除という形態音韻規則の適用があると分析し，他方言にも適用可能であることを示した。加藤ほか（2018）が用いたテ形派生の音韻規則は次の通りである。尚，音韻規則の適用は，この順序で行われるものとされている。

(60)　/t/の有声化　→　語幹末子音の交替　→　母音連続の融合

韻脚形成・韻脚外母音の削除　→　半母音の削除

[加藤ほか 2018: 110]

(60)の適用例として，加藤ほか（2018）にて示されている黒木方言の用例を示す。

(61)　基底形：　//kak-te//
↓語幹末子音の交替
kai-te
↓母音連続の融合
kee-te
↓韻脚形成・韻脚外母音の削除
（kee）-te
↓
出力形：　/keete/

[加藤ほか 2018: 112 より，表記方法筆者一部変更]

いては削除されるとしている。

(62)　基底形：　//tunag-te//

↓/t/の有声化

tunag-de

↓語幹末子音の交替

tunai-de

↓母音連続の融合

tunee-de

↓韻脚形成・韻脚外母音の削除

（tune）e-de

↓

tune-de

↓

出力形：　/tunede/

[加藤ほか 2018: 112 より，表記方法筆者一部変更]

加藤ほか（2018）において示される韻脚外母音の削除規則が菊鹿方言に適用できるかどうかについては 5.4.4 項にて後述する。

5.3. 調査方法

本節では，継起副動詞形の形態音韻交替記述のために行った調査の概要を示す。

継起副動詞形の調査は，KK 氏，IT 氏に対して電話での質問調査形式で行った。例文には, 語幹クラスごとに語幹のモーラ数と語幹末分節音の直前の母音を固定した動詞を使い, 筆者が作成したものを用いた。使用した動詞の一覧は付録にて示す。

調査初期段階では，補助動詞構文において現れる継起副動詞形と，そうではない場合の継起副動詞形で形式に違いがあるかについても例文を用いて確認したが, 違いはなかった。以下にその例を示す。

(63)	*nekoba*	*utiti,*	*yoosuba*	*myuu.*
	neko=ba	utus-te	yoosu=ba	mi-u
	猫=ACC	映す-SEQ	様子=ACC	見る-INT

「（鏡に）猫を映して，様子を見よう。」

(64) *yasaiba* *musite* *soreba* *kuta.*
yasai=ba mus-te sore=ba kuw-ta
野菜=ACC 蒸す-SEQ =ACC 食べる-PST
「野菜を蒸して，それを食べた。」

5.4. 調査結果

本節では，先に述べた継起副動詞接辞の振る舞いや，長母音の短音化について詳細に述べる。

以下に，菊鹿方言の継起副動詞形のデータを示す。非文であるという回答が得られたものには*を付け，自分では言わないが他者が言っていた場合に容認できるという回答が得られたものには△を付ける。空欄については未調査である。KK 氏，IT 氏で回答に差があった部分については特筆する。

表 25. 2 モーラ語幹の子音語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
b	tob-「飛ぶ」	/toozi/
	yob-「呼ぶ」	/yoozi/
m	am-「編む」	/oozi/
	yom-「読む」	/yoozi/
	tum-「積む」	/tunde/ */tuuzi/
	kum-「組む」	/kunde/ */kuuzi/
w	kaw-「買う」	/kooti/
	iw-「言う」	/yuuti/
	kuw-「食べる」	/kuuti/
	yow-「酔う」	/yooti/
s	kas-「貸す」	/kyaati/
	mus-「蒸す」	KK 氏 : /musite/
		IT 氏 : /miiti/
	hos-「干す」	/heeti/
t	mat-「待つ」	/matte/
	ut-「打つ」	/utte/
	mot-「持つ」	/motte/
n	sin-「死ぬ」	/sinde/
r	war-「割る」	/watte/

	kir-「切る」	/kitte/
	tur-「釣る」	/tutte/
	ker-「蹴る」	/kette/
	or-「折る」	/otte/
k	yak-「焼く」	/yaati/
	kak-「書く」	/kyaati/
	nak-「泣く」	/nyaati/
	kik-「聞く」	/kiiti/
	muk-「剝く」	/miiti/
	ok-「置く」	/oite/ */eeti/
	tok-「解く」	/teeti/
	ik-「行く」	/itte/ */itti/
g	kag-「嗅ぐ」	/kyaazi/
	nug-「脱ぐ」	/niizi/
	tog-「砥ぐ」	/teezi/

表 26. 3 モーラ語幹の子音語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
b	ukab-「浮かぶ」	/ukozi/ */ukoozi/
	musub-「結ぶ」	/musuzi/ */musuuzi/
	asob-「遊ぶ」	/asozi/ */asoozi/
m	hasam-「挟む」	/hasozi/ */hasoozi/
	osim-「惜しむ」	/osyuzi/ */osyuuzi/ /osizi/ */osiizi/
	tutum-「包む」	/tutuzi/ */tutuuzi/
	tanom-「頼む」	/tanozi/ */tanoozi/
	tizim-「縮む」	/tizyuzi/ */tizyuuzi/
w	araw-「洗う」	/aroti/ */arooti/
	sukuw-「掬う」	/sukuti/ */sukuuti/
	hirow-「拾う」	/hiroti/ */hirooti/
s	tobas-「飛ばす」	/tobyati/ */tobyaati/
	kiyas-「消す」	/kiyati/ */kiyaati/
	utus-「映す」	/utiti/ */utiiti/
	okos-「起こす」	/oketi/ */okeeti/

t	-	
n	-	
r	agar-「上がる」	/agatte/
	hasir-「走る」	/hasitte/
	yabur-「破る」	/yabutte/
	kaer-「帰る」	/kaette/
k	hawak-「はわく」	/hawyati/ */hawyaati/
	kuzik-「挫く」	/kuziti/ */kuziiti/
	omek-「叫ぶ」	/ometi/ */omeeti/
	ugok-「動く」	/ugeti/ */ugeeti/
g	tunag-「繋ぐ」	/tunyazi/ */tunyaazi/
	katug-「担ぐ」	/katizi/ */katiizi/
	kaseg-「稼ぐ」	/kesezi/ */kaseezi/
	isog-「急ぐ」	/isezi/ */iseezi/
	oyog-「泳ぐ」	/oyozi/ */oyoozi/ */oyeezi/ */oeezi/

表 27. 4 モーラ語幹の子音語幹動詞の継起副動詞形（上段 KK 氏，下段 IT 氏の回答）

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
b	yorokob-「喜ぶ」	/yorokozi/ */yorokoozi/
		/yorokozi/ △/yorokoozi/
m	hukuram-「膨らむ」	/hukurozi/ △/hukuroozi/
		/hukuroozi/ △/hukurozi/
	tanosim-「楽しむ」	/tanosyuuzi/ △/tanosyuzi/[15]
		-
	kurusyuuzi-「苦しむ」	/kurusyuuzi/ */kurusyuzi/
		-
w	yasinaw-「養う」	/yasinoti/ △/yasinooti/
		/yasinoti/ △/yasinooti/
	matigaw-「間違う」	/matigoti/ △/matigooti/

[15] tanosim-「楽しむ」の継起副動詞形について何度か調査を行ったが，長母音が短音化するかどうかの回答が定まらず，短音形が第一回答になることもあった。本論文では最後に行った調査の回答を参照している。

		/matigoti/ △/matigooti/
s	ugokas-「動かす」	/ugokyati/ */ugokyaati/
		-
	oikos-「追い越す」	/oiketi/ */oikeeti/
		-
t	-	
n	-	
r	-	
k	harikak-「怒る」	/harikyati/ */harikyaati/
		/harikyati/ △/harikyaati/
	surimuk-「すりむく」	/surimiti/ △/surimiiti/
		-
g	-	

表 28. 5 モーラ語幹の子音語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
s	ukenagas-「受け流す」	/ukenagyati/ */ukenagyaati/
	iinawas-「言い直す」	/iinawyati/ */iinawyaati/
	utikuzus-「打ち崩す」	/utikuziti/ */utikuziiti/
	katisusum-「勝ち進む」	/katisusuzi/ */katisusuuzi/
	utikaes-「打ち返す」	/utikaeti/ */utikaeeti/
	yarinokos-「やり残す」	/yarinoketi/ */yarinokeeti/

表 29. 1 モーラ語幹の母音語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
i	mi-「見る」	/mite/
	ki-「着る」	/kite/
e/u	ne/nu-「寝る」	/nete/
	de/zu-「出る」	/dete/

表 30. 2 モーラ語幹の子音語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
i	oki-「起きる」	/okite/ */okiti/
	orir-「降りる」	/orite/ */oriti/

e/u	ake/aku-「開ける」	/aketi/
	nage/nagu-「投げる」	/nageti/
	ote/out-「落ちる」	/oteti/

表 31. 3 モーラ語幹の母音語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
i	sinzi-「信じる」	/sinzite/ */sinziti/
	senzi-「煎じる」	/senzite/ */senziti/
e/u	sodate/sodatu-「育てる」	/sodateti/

表 32. 4 モーラ語幹の母音語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
i	karonzi-「軽んじる」	/karonzite/ */karonziti/
e/u	tukamae/tukamayu-「捕まえる」	/tukamaeti/

表 33. 1 モーラ語幹の変格活用語幹動詞の継起副動詞形

語幹クラス	語幹	継起副動詞形
変格活用語幹	si-「する」	/site/ */siti/
	ki-「来る」	/kite/ */kiti/

5.4.1. 語幹ごとの/te/の振る舞い

以下に，語幹クラスごとに継起副動詞接辞の振る舞いを示す。

表 34. 動詞テ形の出力形

子音語幹	b 語幹	/zi/（例 : /ukozi/「浮かんで」）
	m 語幹	/zi/（例 : /hasozi/「挟んで」）
	w 語幹	/ti/（例 : /kooti/「買って」）
	s 語幹	/ti/（例 : /kyaati/「貸して」）
	t 語幹	/te/（例 : /matte/「待って」）
	n 語幹	/de/（例 : /sinde/「死んで」）
	r 語幹	/te/（例 : /watte/「割って」）
	k 語幹	/ti/（例 : /yaati/「焼いて」）
	g 語幹	/zi/（例 : /kyaazi/「嗅いで」）
母音語幹	i 語幹	/te/（例 : /kite/「着て」）

	e/u 語幹	/ti/, /te/（例 : /sodateti/「育てて」，/nete/「寝て」）
変格活用語幹		/te/（例 : /kite/「来て」，/site/「して」）

今回取り上げた変数は「語幹のモーラ数」「語幹末分節音の直前の母音」「語幹末分節音」であったが，このうち「語幹末分節音の直前の母音」によって振る舞いが変わることはなかった。「語幹のモーラ数」については，大部分の動詞語幹においてモーラ数による振る舞いの違いは現れなかったが，e/u 語幹でのみ，語幹が 1 モーラの時には/te/，2 モーラ以上の時には/ti/が現れるという結果になった。

5.4.2. 子音語幹動詞における継起副動詞接辞の母音の交替

本項では，子音語幹動詞に継起副動詞接辞が接続した際に起こる，接辞に含まれる母音の交替が，「語幹末分節音」によって引き起こされるという予想に反する結果について述べる。

s 語幹動詞においては，継起副動詞接辞が表層形で/ti/と現れる場合と/te/と現れる場合とがある。例えば，mus-「蒸す」の継起副動詞形は/musite/となるのに対し，utus-「映す」の継起副動詞形は/utiti/となる。

s 語幹動詞において継起副動詞接辞が/te/となる場合に共通しているのは，「語幹末分節音に形態音韻交替が起こっていない」という点である。同時に，s 語幹動詞においては継起副動詞接辞が/ti/となる場合は「語幹末分節音の形態音韻交替が必ず起こっている」ということも言える。

また，同じように m 語幹，k 語幹でも，継起副動詞接辞が表層形で/ti/と現れる場合と/te/と現れる場合とがある。これらにおいても，上記と同様のことが言える[16]。

語幹末分節音が特定の子音の時，後続する接辞によって語幹末子音が母音交替を起こす（下地 2016）。交替後の母音は/i/または/u/で，母音体系で見るとどちらも狭母音である。

菊鹿方言における継起副動詞形に含まれる母音の交替について，子音語幹動詞については，語幹末子音の母音への交替の結果，継起副動詞接辞-te に含まれる母音/e/が語幹末分節音の狭母音であるという特徴に部分的に同化することによって引き起こされると解釈する。

5.4.3. 母音語幹動詞における継起副動詞接辞の母音の交替

本項では，母音語幹動詞に継起副動詞接辞が接続した際に起こる，接辞に含まれる母音の交替と，母音語幹動詞の r 語幹化との関連性が，菊鹿方言においても存在することを述べる。

菊鹿方言では，母音語幹動詞の中でも，2 モーラ以上の e/u 語幹動詞でのみ継起副動詞接

[16] 例外として ok-「置く」の継起副動詞形/oite/があるが，これについては後述する。

辞の表層形が/ti/となり，i 語幹動詞，1 モーラの e/u 語幹動詞では継起副動詞接辞の表層形が/te/となる。

有元（2007）の考察に倣い，菊鹿方言の母音語幹動詞の r 語幹化の様相を参照すると，菊鹿方言では i 語幹動詞，1 モーラの e/u 語幹動詞が r 語幹化する傾向にあり[17]，これらの語幹においては継起副動詞接辞が/te/として現れる。

r 語幹化する母音語幹動詞とそうでない動詞とで，継起副動詞形の現れ方に違いがある理由について，現時点で十分な分析ができていない。このため，本項では観察的事実を述べるに留める。

5.4.4. 長母音の短音化

継起副動詞形の長母音の短音化は，語幹のモーラ数によって異なる。まず 2 モーラ語幹の子音語幹動詞では短音化しない。次に 3 モーラ語幹，5 モーラ語幹の子音語幹動詞では必ず短音化する。最後に 4 モーラ語幹の子音語幹動詞の場合には，短音化することもあればしないこともある。よって 4 モーラ語幹以外の場合においては，加藤ほか（2018）の「韻脚外母音の削除」規則が適用されていると考えられる。

以下に，4 モーラ語幹の子音語幹動詞のデータを示す。非文であるという回答が得られたものには*を，自分では言わないが他者が言っていた場合に容認できるという回答が得られたものには△を付ける。話者によって回答にばらつきがあること，長母音の種類によっても，長母音が短音化するかどうかの違いが見えるところに着目されたい。

[17] 非過去否定，義務，意志，否定継起で屈折する時に r 語幹化する。

表 35. 菊鹿方言の継起副動詞のデータ（4 モーラ語幹，子音語幹動詞）

動詞	長母音	KK 氏	IT 氏
ugokas-「動かす」	aa	/ugokyati/ */ugokyaati/	-
harikak-「怒る」		/harikyati/ */harikyaati/	/harikyati/ △/harikyaati/
surimuk-「すりむく」	ii	/surimiti/ △/surimiiti/	-
kurusim-「苦しむ」	uu	/kurusyuuzi/ */kurusyuzi/	-
tanosim-「楽しむ」		/tanosyuuzi/ △/tanosyuzi/	-
oikos-「追い越す」	ee	/oiketi/ */oikeeti/	-
yorokob-「喜ぶ」	oo	/yorokozi/ */yorokoozi/	/yorokozi/ △/yorokoozi/
hukuram-「膨らむ」		/hukurozi/ △/hukuroozi/	/hukuroozi/ △/hukurozi/
matigaw-「間違う」		/matigoti/ △/matigooti/	/matigoti/ △/matigooti/
yasinaw-「養う」		/yasinoti/ △/yasinooti/	/yasinoti/ △/yasinooti/

菊鹿方言において加藤ほか（2018）の「韻脚外母音の削除」規則が適用されるとして，4 モーラ語幹に対してその処理を行うと次のようになる。韻脚外であるとして削除されて発話される箇所に下線を引いている。

(65) 「怒って」[hari][kyaa]-ti→/harikyaati/
cf.「貸して」[kyaa]-ti→/kyaati/
cf.「回して」[mawya]<u>a</u>-ti→/mawyati/

このように，4 モーラ語幹においては長母音が短音化することはないというのが「韻脚外母音の削除」規則であるが，菊鹿方言の 4 モーラ語幹においては，それに反するように，ほとんどの継起副動詞形で短音化している。

しかしその中でも，/tanosyuuzi/「楽しんで」や/kurusyuuzi/「苦しんで」などの，長母音が/uu/となる動詞は短母音化しない傾向にあり，長母音が/oo/となる動詞の中でも/hukuroozi/「膨らんで」は短母音化しない傾向にある。これらの動詞はすべて，語幹末子音が m の m 語幹動詞である。

/m/という子音は，他の子音に比べて聞こえ度（sonority; 窪薗 1998: 50）が高く，より母音に近い子音であると言える。この点から，4 モーラの m 語幹動詞の継起副動詞形では，他の子音語幹動詞の継起副動詞形に比べて 1 モーラ長いように発話者によって認識され，発話者としては短母音化しているつもりでも，結果として短母音化していないような形で現れる，という可能性が考えられる。

現段階では，4 モーラ語幹動詞において短音化が起こる理由を説明することができないため，加藤ほか（2018）の「韻脚外母音の削除」規則があるとし，4 モーラ語幹は，その他のモーラ数の語幹における短母音化から類推されて起こるものであるとする。

5.5.継起副動詞形における形態音韻規則

本節では，菊鹿方言の継起副動詞形の出力がどのような規則，適用順序によるものかを，子音語幹動詞，母音語幹動詞，変格活用語幹動詞の順に示す。

5.5.1. 子音語幹動詞への接続

継起副動詞接辞が子音語幹動詞に接続した場合の形態音韻規則を以下に示す。規則の適用は，この順序で行われるものとする。

(66) 語幹末子音が b, m, n, g のとき，接辞に含まれる t を有声化せよ。

a. 「読んで」yom-te → yom-de

b. 「編んで」am-te → am-de

c. 「死んで」sin-te → sin-de

d. 「脱いで」nug-te → nug-de

(67) 語幹末子音が b, m, w のとき，これを u に，語幹末子音が s, k, g のとき，これを i に交替せよ。

a. 「読んで」yom-de → you-de

b. 「編んで」am-de → au-de

c. 「洗って」araw-te → arau-te

d. 「動かして」ugokas-te → ugokai-te

e. 「叫んで」omek-te → omei-te

f. 「脱いで」nug-de → nui-de

(68)　接辞に含まれる e を語幹末の母音に同化せよ[18]。

a.　「読んで」you-de → you-zi

b.　「動かして」ugokai-te → ugokai-ti

(69)　語幹末子音が r の場合，これを t に同化せよ。

「走って」hasir-te → hasit-te

(70)　母音融合規則を適用せよ。

a.　ai → yaa

「焼いて」yai-ti → yyaa-ti

b.　ui → ii

「脱いで」nui-zi → nii-zi

c.　ei → ee

「叫んで」omei-ti → omee-ti

d.　oi → ee

「起こして」okoi-ti → okee-ti

e.　au → oo

「編んで」au-zi → oo-zi

f.　iu → yuu

「惜しんで」osiu-zi → osyuu-zi

g.　ou → oo

「読んで」you-zi → yoo-zi

(71)　語幹に含まれる y の連続のうち一方を削除せよ。

「焼いて」yyaa-ti → yaa-ti

(72)　語幹の左端から二音ずつ韻脚を形成し，韻脚外の母音を削除せよ。

a.　「飛ばして」tobyaa-ti → [tobya]a-ti → /tobyati/

cf.「焼いて」yaa-ti → [yaa]-ti → /yaati/

b.　「挫いて」kuzii-ti → [kuzi]i-ti → /kuziti/

cf.「脱いで」nii-zi → [nii]-zi → /niizi/

c.　「包んで」tutuu-zi → [tutu]u-zi → /tutuzi/

cf.「言って」yuu-ti → [yuu]-ti → /yuuti/

---

[18] 語幹末子音の交替後の語幹末母音/i/，/u/の狭母音であるという特徴に同化する。

d.　「叫んで」omee-ti → [ome]e-ti → /ometi/

cf.「砥いで」tee-zi → [tee]-zi → /teezi/

e.　「浮かんで」ukoo-zi → [uko]o-zi → /ukozi/

cf.「編んで」oo-zi → [oo]-zi → /oozi/

5.5.2.　例外

5.5.1 項で示した形態音韻規則では説明できない例を挙げる。

5.5.2.1. 代償延長する例

oyog-「泳ぐ」の継起副動詞形は/oyozi/である。

上述した形態音韻規則から導かれる継起副動詞形は/oyezi/である。以下に，予測された出力形を導く形態音韻規則の適用順序を示す。

(73)　基底形：　//oyog-te//

↓/t/の有声化

oyog-de

↓語幹末子音の交替

oyoi-de

↓/e/の語幹末母音への同化

oyoi-zi

↓母音融合

oyee-zi

↓韻脚形成・韻脚外母音の削除

（oye）e-zi

↓

oye-zi

↓

出力形：　/oyezi/

しかし，菊鹿方言において本来/y/の後に/e/は後続しない。よって，/ye/という音連続を避けるために，母音融合を起こさず語幹末母音が脱落し，その後代償延長が起こったと推測する。この規則を以下のように設定する。

(74)　母音融合規則適用後の形態が音素配列を満たさない場合，語幹末母音を削除し，代償延長せよ。

「泳いで」oyoi-zi → oyo-zi → oyoozi

(74)の規則を用いた，/oyozi/「泳いで」の派生規則適用過程を以下に示す。

(75)　基底形：　//oyog-te//
　　↓/t/の有声化
　　oyog-de
　　↓語幹末子音の交替
　　oyoi-de
　　↓/e/の語幹末母音への同化
　　oyoi-zi
　　↓語幹末母音の削除・代償延長
　　oyoo-zi
　　↓韻脚形成・韻脚外母音の削除
　　（oyo）o-zi
　　↓
　　oyo-zi
　　↓
　　出力形：　/oyozi/

語幹に含まれる母音の代償延長が起こる例は他に/osizi/「惜しんで」があるが，まだ 2 例のみの確認に留まっているため, 今後はこのほかにも例が存在するか調査する必要がある。

5.5.2.2. 標準語形を借用する例

5.5.1 項で示した形態音韻規則では導かれない形で現れた例外の中には, 標準語と同じ形のものがある。k 語幹動詞 ok-「置く」，s 語幹動詞 mus-「蒸す」，m 語幹動詞 tum-「積む」，kum-「組む」の継起副動詞形である。

以下に KK 氏の回答を示す。形態音韻規則から導かれる形式，形態音韻規則からは導かれないが，語幹末子音の母音への交替の結果，継起副動詞接辞の表層として現れると考えられる形式についても確認を行っている。*は非文であることを表す。

(76)　*{oite　*eeti　*oiti}*
　　ok-te
　　置く-SEQ
　　「置いて」

(77) *{musite　*miiti　*musiti}*
mus-te
蒸す-SEQ
「蒸して」

(78) *{tunde　*tuuzi　*tunzi}*
tum-te
積む-SEQ
「積んで」

(79) *{kunde　*kuuzi　*kunzi}*
kum-te
組む-SEQ
「組んで」

これらは全て，話者により方言形ではなく標準語の借用形を用いると判断されていると考えられる。それぞれ，標準語の借用形が用いられているとする根拠を述べる。

まず，「蒸して」の場合，形態音韻交替の結果として予測される形式は/miiti/であるが，KK 氏への調査では/musite/の形で現れた。これは，「蒸す」という動詞が KK 氏にとってあまり馴染みのないものであり，普段使わないことによるものではないかと考える。実際に，IT 氏の場合は第一回答で/miiti/が現れたことも，この分析の根拠である。よってここで起こった/musite/という出力は，方言形を知らないために起こった標準語の借用であると推察する。

次に「積んで」「組んで」の場合についてだが，こちらは KK 氏，IT 氏どちらも/tunde/，/kunde/で現れる。形態音韻規則に則れば，/tuuzi/，/kuuzi/のように現れるはずである。このような積極的に方言形が避けられる例では，基底形と出力形に著しく違いが現れており，方言形の/tuuzi/や/kuuzi/で出力された場合，伝達が困難になることが考えられる。よって，基底形と出力形に著しい差が出る場合には，標準語が借用されると推察する。

「置いて」が本来予測される/eeti/という形ではなく/oite/となるのも，上記同様の理由によるものだと考えられる。しかし，/tunde/や/kunde/と違うのは，語幹末分節音の母音への交替が起こっている点である。

語幹末分節音の交替が起こっているため，/eeti/にはならずとも，/oiti/のようになる可能性はある。これが起きないのは，話者の中に「母音融合が起きれば/te/は/ti/になる」という認識があるからではないかと推察する。

本来，語幹末子音の母音への交替が接辞の母音交替に関わるはずが，語幹末子音の母音への交替後，ほとんどの動詞の継起副動詞形において母音融合するために，話者が母音融合形と/ti/は同じ環境で現れると認識している可能性がある。これにより，「置いて」でも標準語を借用する形になっていると考えられる。

5.5.3. 母音語幹動詞への接続

継起副動詞接辞が母音語幹動詞に接続した場合の形態音韻規則については，分析の余地があるが，現時点で採用する規則を以下に示す。

(80) 語幹末母音が e のとき，接辞に含まれる e を i に交替せよ。（語幹モーラ数が 1 の場合を除く）
「開けて」//ake-te// ➔ ake-ti
cf. 「降りて」//ori-te// ➔ /orite/

この分析の問題点は，子音語幹動詞への接続では語幹末母音への同化を起こすと分析していた継起副動詞接辞-te に含まれる母音が，i 語幹動詞や 1 モーラの e/u 語幹動詞に対しては同化を起こさない理由を説明できないということである。

5.5.4. 母音語幹が r 語幹化している場合の接続

母音語幹動詞のうち，継起副動詞形が/te/で現れるか/ti/で現れるかの区別は，5.4.3 項で示した通り，i 語幹動詞，1 モーラの e/u 語幹動詞であるか，2 モーラ以上の e 語幹動詞であるかによって決まり，この区別は，母音語幹動詞の r 語幹化の有無の区別と同じである。これを踏まえ，母音語幹動詞が基底形として，r 語幹化し得る音節/R/を持つことを前提とした形態音韻規則を設定することができる。以下にその規則を示す。尚，規則の適用はこの順序で行われるものとする。

(81) 語幹末分節音が b, m, n, g のとき，接辞に含まれる t を有声化せよ。
a. 「編んで」am-te ➔ am-de

(82) 語幹末分節音が b, m, w のとき，これを u に，語幹末分節音が s, k, g のとき，これを i に交替せよ。
a. 「編んで」am-de ➔ au-de

(83) 語幹末分節音が母音の場合には/te/に含まれる母音/e/を/i/に交替し，それ以外の場合には/te/を容認せよ。

a.　「見て」miR-te → miR-te

b.　「寝て」neR-te → neR-te

c.　「受けて」uke-te → uke-ti

d.　「切って」kir-te → kir-te

e.　「編んで」au-de → au-zi

f.　「来て」k-te →k-te

(84)　語幹末分節音が子音語幹の r の場合，これを t に同化せよ。

a.　「切って」kir-te → kitte

(85)　語幹末分節音が r 語幹化した母音語幹の R の場合，/te/が接続したとき r 語幹を容認できないため，語幹末の R を削除せよ。

a.　「見て」miR-te → mi-te

b.　「寝て」neR-te → ne-te

(86)　母音融合規則を適用せよ。

a.　「編んで」au-zi → oo-zi

(87)　語幹に含まれる y の連続のうち一方を削除せよ。

(88)　変格活用語幹において，語幹を拡張せよ。

a.　「来て」k-te → k-i-te

r 語幹化する母音語幹動詞に継起副動詞接辞が接続する時，初めから基底形に/r/が含まれるという分析は，5.2.1 項でも述べた通り，既に有元（2007）においてなされている。継起副動詞接辞に含まれる母音の交替規則適用の際に，語幹末尾の/r/が参照される，という分析は，本項での分析と同じである。

しかし，本項における分析では有元と違い，あくまで r 語幹動詞と母音語幹動詞は別物とし，母音語幹動詞が r 語幹化する傾向を語幹末分節音/R/の付与によって表したことで，より内的一貫性のある形態音韻規則を立てることができた。

母音語幹動詞が基底形として，r 語幹化し得る音節/R/を持つことを前提としたこの分析によって，子音語幹動詞・母音語幹動詞の継起副動詞形における形態音韻交替を一度に説明することも可能である。

しかしここで設けた規則の中には，形態音韻交替を説明するために便宜上設けたものもあり，子音語幹動詞・母音語幹動詞の継起副動詞形の形態音韻交替を一度に扱うことが正

しいのかどうかについては疑問が残る。(83)の接辞に含まれる母音の交替規則についても，語幹末分節音が母音であることが継起副動詞接辞に含まれる母音の交替の要因としているが，e/u 語幹動詞に対しても接辞の母音交替が起こる理由は解明できていない。母音語幹動詞の継起副動詞形については，今後更なる調査が必要である。

5.5.5. 変格活用語幹動詞への接続

継起副動詞接辞が変格活用語幹動詞に接続した場合，形態音韻交替は起こらない。

(89) *site*
si-te
する-SEQ
「して」

(90) *kite*
ki-te
来る-SEQ
「来て」

6. おわりに

本論文では，菊鹿方言の動詞屈折形態論の記述，継起副動詞形の形態音韻交替の一般化を試みた。

菊鹿方言では，文終止および名詞修飾の環境において，直説法（極性，時制），義務法で屈折し，文終止のみの環境において，意志法，命令法で屈折し，副動詞の環境において継起，条件，並列，目的で屈折する。

菊鹿方言の継起副動詞形は複雑な形態音韻交替を起こしており，継起副動詞接辞の表層形には，/te/，/de/，/ti/，/zi/の 4 種類がある。子音語幹動詞に限っては，継起副動詞接辞に含まれる子音の交替は語幹末分節音によって引き起こされる形態音韻交替ではなく，語幹末分節音の狭母音への交替によって引き起こされる，接辞に含まれる母音/e/の狭母音への部分同化である，ということができる。

母音語幹動詞の継起副動詞形における接辞の表層形は，r 語幹化する母音語幹動詞ならば/te/，そうでない母音語幹動詞ならば/ti/となる。母音語幹動詞が，接辞によって基底形を変えるのではなく，基底形の段階で既に r 語幹になりうる要素を持っているということを前提とすれば，語幹末分節音が母音の場合には/ti/，それ以外の場合には/te/となる，という形で一般化することができる。しかし，語幹末分節音が母音であることが，接辞に含まれ

る母音/e/の/i/への交替の要因だとすることは，先に見た「接辞に含まれる母音/e/の狭母音への部分同化」という根拠と比べると説得性に欠ける分析であるため，今後も更なる調査・検証が必要である。

継起副動詞形において起こる長母音の短音化の一般化についても今後の課題とする。菊鹿方言の継起副動詞形では，語幹が 3 モーラ以上の子音語幹動詞の場合，長母音が期待される環境で短母音が出現する。この長母音の短音化は，3 モーラ，5 モーラ語幹の場合には必ず起きるが，4 モーラ語幹動詞の場合には，一部短音化が起きないことがある。このようなモーラ数による差は，菊鹿方言が語頭から 2 モーラずつフットを形成する言語である可能性を示唆する，重要なデータである。しかし，そうであるとすれば何故 4 モーラ語幹動詞の場合にも短音化が起きるのか，本論文では体系的に記述を行うに至らなかった。今後，長母音が短音化を引き起こす環境についてより詳細に分析するため，更なる調査が必要である。

長母音の短音化について一般化するため，今後は音韻的な側面からのアプローチも求められる。詳細な分析は行っていないが，長母音形と短母音形のピッチの違い，長母音形と短母音形それぞれの場合の継起副動詞接辞/ti/の無声化の度合いの違いなどといった，細かい違いが見受けられる。

長母音の短音化は，継起副動詞形や，継起副動詞形と同様の形態音韻交替を起こす過去肯定形などの頭子音が/t/の接辞の後続による屈折形態だけでなく，意志形においても見られる。こういった他の形式の短音化とも関連性が無いか，検証していく必要がある。

参照文献

秋山正次（1983）「熊本県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『九州地方の方言』207-235. 東京 ： 国書刊行会.

有元光彦 （2007）『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』東京 ： ひつじ書房.

有元光彦（2012）「タイプ PD’’’, PG 方言の発見 ： 熊本県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形 における形態音韻現象」『研究論叢. 第 1 部・第 2 部, 人文科学・社会科学・自然科学』62: 37-55. 山口 ： 山口大学教育学部.

加藤幹治・井手口将仁（2018）「福岡県八女市黒木方言における子音語幹動詞のテ形派生音韻規則 ： 韻脚を形成しない母音の削除」日本言語学会第 156 回大会. 東京大学, 2018 年 6 月 23 日.

上村孝二（1983）「九州方言の概説」飯農毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『九州地方の方言』1-28. 東京 ： 国書刊行会.

窪薗晴夫（1998）『日英語対照による英語学演習シリーズ 1 音声学・音韻論』東京 ： くろしお出版.

下地理則（2016）「音素論と形態音韻論の中間報告」下地理則・小川晋史・新永悠人・平塚雄亮・坂井美日（編）『尾前調査班　中間報告書　−宮崎県椎葉村尾前方言簡易語彙集と文法概説−』7-14. 東京 ： 国立国語研究所.

下地理則（2020）「方言研究における例文提示法について」日本方言研究会（編）『方言の研究』6: 119-141. 東京 ： ひつじ書房.

中村京介（2019）「長崎県五島列島宇久島野方方言の文法概説」修士論文, 東京外国語大学.

長屋尚典（2015）「屈折・派生」斎藤純男・田口喜久・西村 義樹（編）『明解言語学事典』54. 東京 ： 三省堂.

藤本憲信（2002）『熊本県菊池方言の文法』熊本 ： 熊本日日新聞情報文化センター.

藤本憲信（2004）『熊本県菊池方言辞典』熊本 ： 熊本日日新聞情報文化センター.

松岡葵（2021）「福岡県柳川市方言の文法概説」修士論文, 九州大学.

宮岡大（2021）「日本語諸方言におけるラ行五段化の方言間比較と通方言的一般化―語幹末母音・語幹モーラ数・接辞の観点から―」修士論文, 九州大学.

渡辺己（2014）「形態論入門」2014 年言語学会夏期講座テクスト.

Bickel, Balthasar and Johanna Nichols (2007) Inflectional morphology. In: Timothy Shopen (ed.) Language Typology and Syntactic Description III, 169–240. Cambridge: Cambridge University Press.

Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims（2010）Understanding morphology. London: Hodder Education.

付録

以下では，本論文作成のために行った質問調査の例文と調査の結果得られたデータの記述，菊鹿方言話者に対して行った自然談話調査の結果得られた談話データの記述を行う。

付録 1 調査例文・結果

以下に，動詞屈折形態に関する調査例文とその調査結果，継起副動詞形に関する調査例文とその調査結果を示す。調査結果の提示順が話者による回答順である。非文であるという回答が得られたものには*を，自分では言わないが他者が言っていた場合に容認できるという回答が得られたものには△を付ける。

調査は全体を通して KK 氏に，部分的に IT 氏に行っているため，ここでは KK 氏の回答を主に示し，違う回答が得られた場合のみ IT 氏の回答も示す。

tob-「飛ぶ」

意味機能	標準語訳	回答
非過去肯定	鴨は飛ぶ。	kamowa tobu.
過去肯定	飛行機が飛んだ。	hikookino tooda.
条件	思い切って飛べば渡れるよ。	omokitte tobuto/toodara/tobunara/toodanara, mukoogisi wataruzzo.
意志	高い飛び込み台から飛ぼう。	takaka tobikomidaikara toboo[19].
命令	五回は飛べ。	gokaiwa tobe.
禁止	梯子の上から飛ぶな。	hasigonuekara tobuna.
継起	ロケットが無事に飛んで，皆大騒ぎした。	rokettoga buzini toozi, mina oosawagisita.
否定継起	（高いところから）飛ばないで，降りてきた。	tobande/tobadena, oritekita.
並列	兎が飛んだり走ったりしている	usagino toodari hasittari siyoru.
目的	（あいつなら）飛びに行ったよ。	tobigya/tobi ittayo.

[19] 急いで言うときは短音化し，丁寧に言うときは長音で発話する。

nom-「飲む」

意味機能	標準語訳	回答
非過去	今日は酒をたくさん飲む(ぞ)。	kyoowa sakeba hoippyaa nomuzo.
過去/完了	昨日も飲んだ。	kinoomo nooda
テ形	昼間から酔ってみた	hirumakari noozimita/*nozimita.
条件	この薬を飲めば，痛みが治まるよ。	konokusuriba nomuto/noodara/nomunara ikarino osamabbai.
意志	（風邪だから）薬を飲もう。	kazedaken kusuriba nomo/nomoo.
否定継起	今日は，酒は飲まないで，お茶にしよう。	kyoowa sakeba nomande otyani syu.
義務	薬を飲まなければならない。	kusuriwo nomanyan.
命令	（薬を）早く飲め。	hayo nome.
禁止	飲むな！	nomuna.
並列	昨日は酒を飲んだり，いっぱい話をしたりした。	kinoowa sakeba noodari ippya hanasiba sitari sita.
目的	今日は飲みに行くから。	koowa nomigya/nomi ikuken.

kaw-「買う」

意味機能	標準語訳	回答
非過去	お金がたまったら家を買う！	kanen tamattara/tamattanara ieba kau.
過去/完了	太郎は，昨年家を買った。	taroowa kyonen ieba koota.
テ形	太郎は，一昨年家を買って，引っ越した。	taroowa ototosi ieba kooti, hikkosita.
条件	鍋さえ買えば，フライパンはいらない。 cf. 命さえあれば，金は要らない。	nabesyaga kauto/kootarya/kootara/△kaunara, hokawa iran. cf. inotisyaga atto kanewa iran.
意志	やっぱりフライパンも買おう。	yappa huraipanmo kao.
否定継起	フライパンは買わないで，炊飯器を買おうよ。	huraipanna kawande/kawadena suihankiba kauzo/kaoi.
義務	しゃもじは買わなければならない。	syamoziwa kawanyan.
命令	良い鍋を買え。	yoka nabeba kae.
禁止	安い鍋は買うな。	yasuka nabewa kauna.
並列	食器を買ったり，レストランに行ったりした。	syokkiba kootari resutoranni itarisita.
目的	食器を買いに行った。	syokkiba kaigya/kai itta.

das-「出す」

意味機能	標準語訳	回答
非過去	明日，手紙を出すよ。	asita teganba dasubai.
過去/完了	この前手紙を出した。	konomae tegamiba zyaata.
テ形	明日は手紙を出して，それから買い物しよう。	asitawa tegamiba zyaati/*zyati sorikari kaimonba syuu.
条件	明日までに出せば間に合うよ。	asitamadeni dasuto/dasunara/dasitara/dasutosyaga maniaubai.
意志	絶対に明日手紙を出そう。	zettaini asita tegamiba daso/dasoo.
否定継起	手紙は出さないで，メールにした。	tegamiwa dasande/dasadena meeruni sita.
義務	手紙を出さなければならない。	tegamiba dasanyan.
命令	（手紙を）早く出せ。	hayo dase.
禁止	（手紙は）まだ出すな。	mada dasuna.
並列	（遠くに住む友達に）たまに手紙を出したり，電話を掛けたりするよ。	tamani tegamiba zyaatari denwaba sitari surubai.
目的	手紙を出しに行ってくる。	tegamiba dasigya/dasi itekuru.

mat-「待つ」

意味機能	標準語訳	回答
非過去	毎朝ここでバスが来るのを待つ	maiasa kokozi basuno kuttoba matu.
過去/完了	（待ち合わせに遅れた友人に）3 時間は待ったよ！	sanzikanna mattabai.
意志	ここで少し待とう	kokozi sukoosi mato/matoo.
否定	遅れた人は待たないよ！	okuretamonna matanbai.
義務	先生をここで待たなければならない。	senseeba kokozi matanyan.
命令	ここで待て。	kokozi mate.
禁止	邪魔になるからここでは待つな。	zyaman naruken kokozya matuna.
継起	あいつを待って，出発しよう。	ayatuba matte syuppatusyui.
否定継起	あいつを待たないで，出発しよう。	ayatuba matande/matadena syuppatusyui.
条件	もう少し待てば，バスが来る。	moosukosi /matto/ △ mattara/ △ mattarya/matunara/mattosyaga basuno kurubai.
並列	(持つ，立つ)重いものを持ったり，急に立ったりすると膝が痛い。	omokatuba mottari kyuuni tattari sutto hizano itaka.
目的	挨拶運動に立ちに行ったら雨が降っていた。	aisatuundooni tatigyaitarya amen huttotta.

sin-「死ぬ」

意味機能	標準語訳	回答
非過去肯定	ばい菌は熱で死ぬ	baikinna netude sinu/*sinuru.
過去肯定	ゴキブリを叩いたらすぐに死んだ	gokiburiba tatyaatara sugu sinda.
推量	殺虫剤をかければゴキブリはすぐ死ぬだろう	sattyuuzaiba kakutto gokiburyaa sugu sinudo/sinuddo.
意志	殿の為であれば私は喜んで死のう。	tonosanno tamenara watasiwa yorokonde sinoo.
禁止	まだ死ぬな。	mada sinuna/sinna.
命令	（ゴキブリを叩いて）死ね！	sine.
非過去連体・勧誘	死ぬときは一緒に死のう。	orega sinu/*sinuQ tokiwa issyoni sinoi.
可能	思い残すことなく死ねる。	omoinokosukotu nyaagotu sinuru.
受身	子どもに先に死なれるのは辛い。	kodomoni sakini sinaruttowa kituka.
結果継続	ゴキブリが死んでいる	gokiburino sindoru.
動作継続	ゴキブリが死にかけている	gokiburino sinoode/te siyoru.
動作継続	ゴキブリが死んでいる	gokiburino sinyoru.
肯定継起	秀吉が死んで，再び戦国の世になった。	hideyosiga sinde, mata sengokuzidaini natta.
非過去否定	ゴキブリはなかなか死なない。	gokiburiwa nakanaka sinan.
非過去否定（取り立て）	そんなことをしても，ゴキブリは死にはしない。	dogyansitattya gokiburiwa sinyasen/sinan.
使役	（金魚すくいで金魚をとってもいつも）金魚を死なせる。	kingyoba sinasuQ.*sinaseru.
条件	あいつが死ねば，全て丸く収まるのに。	aituga sinutto/△sinuto/sinnara/sindanara/sinutosyaga/sinuttosyaga maruku osamarutoni.

kir-「切る」

意味機能	標準語訳	回答
非過去	私が肉を切る。	watasiga nikuba kiru.
過去/完了	あいつとは，三年前に縁を切った。	aitutonyaa sannenmaeni enba kitta.
意志	あいつとは縁を切ろう。	aitutonya enba kiro/kiroo.
否定	（料理が苦手なので）わたしは切らないよ。	orewa yasaiwa kiran.
義務	野菜を切らなければならない。	yasaiba kiranyan.
命令	野菜を切れ。	yasaiba kire.
禁止	それはまだ切るな。	sora mada kinna.
継起	にんじんを切って，鍋に入れて。	ninzinba kitte nabeni ireeti.
否定継起	野菜を切らないで，ちぎって鍋に入れる。	yasaiba kirande/kiradena tigitte nabeni iruru.
条件	野菜を小さく切れば，子どもでも食べやすい。	yasaiba komo kitto/kittosyaga/ kittarya/△kittara/ △kinnara kodomotetya kuiyasuka.
並列	野菜を切ったり，ご飯を炊いたりした。	yasaiba kittari gohanba tyaatari sita.
目的	河川敷に走りに行く。	kasenzikini hasirigyaiku.

kak-「書く」

意味機能	標準語訳	回答
非過去肯定	年賀状は明日書く。	nengazyoowa asita kaku.
過去肯定	去年も書いた。	kyonenmo kyaata.
推量	妻は来年も年賀状を書くだろう。	kanaiwa rainenmo nengazyooba kakudo.
意志	俺も書こう。	oremo kakoo.
勧誘	一緒に書こうよ。	issyoni kakoi.
禁止	まだ書くな。	mada kakuna.
条件	花子に手紙を書けば，きっと返事をくれるだろう。	hanakoni tegamiba kakuto/ kakunara henziba kuruddo.
肯定継起･命令	まず先生に書いて，それから友達にも書け。	mazu senseeni kyaati sorukara senseeni kake.
非過去連体	宛名を書く時は丁寧に書きなさい。	atenaba kakutokiwa teineini kakanyanzo.
非過去否定	やっぱり面倒だから書かない。	yappari mendouzyaken kakan.
非過去否定（取り立て）	あいつは絶対に手紙を書きはしない。	ayatuwa zettai tegamiwa kakyasen.
否定継起	太郎になんて書かないで，先生にまず書くべきだ。	taroonidon kakantetya senseeni kakanyantai.
否定継起	あいつはいくらいっても返事を書かなくて，困る。	ayatuwa dosiko yuutattya henziba kakanken komaru.
非過去否定連体	年賀状を書かない年はない。	nengazyooba kakan tosiwa naka.
過去否定	去年は年賀状は書かなかった。	kyonenwa nengazyoowa kakanzyatta/kakazyatta.
推量否定	あいつは年賀状は書かないだろうね。	ayatuwa nengazyoowa kakanzyaroone.
否定条件	今年賀状を書かなければ，もう書く時間は無いよ。	ima nengazyooba kakannara kaku zikanna nakazoo.
結果継続	もう作文は書いているよ。	moo sakubunna kaitooru.
動作継続	今作文を書いている。	ima sakubunba kakiyoru.
可能	あの子はむずかしい字を書くことができる。	ankowa muzukasika ziba kakkiru/kakuru.

受身	小さな字で書かれるとよく見えない。	komakazide kakarutto yoo mien.
使役	何とかしてあいつに手紙を書かせるぞ。	dogyankasite ayatuni tegamiba kakasuzzo.

kog-「漕ぐ」

意味機能	標準語訳	回答
非過去	服を脱ぐ。	hukuba nugu.
過去/完了	服を脱いだ。	hukuba niida.
意志	靴下を脱ごう。	kutusitaba nugo.
否定	暑いから脱げと言われたけど俺は脱がない。	atukaken nugete iwaretabatten orewa nugan.
義務	同じタイミングで漕がなければならない。	uwagiba nuganyan.
命令	もっと漕げ！	uwagiba nuge.
禁止	今は漕ぐな！	kutusitaba nuguna.
継起	船を漕いで，向こう岸に渡ろう。	uwagiba niizi, hangaani kakuru.
否定継起	左側は漕がないで，右側だけ漕いで左折する。	uwagiba nugande/ nugadena sonomama kitoku.
条件	あともう少し漕げば，向こう岸に渡れるぞ。	uwagiba nuguto/nugutosyaga/ nugunara/niidara/niidarya tyoodo yokabai.
並列	あの川では舟を漕いだり，釣りをしたりすることができる。	huneba keedari turiba sitari dekuru.
目的	舟を漕ぎに行こう。	huneba kogigya ikoi.

ki-「着る」

意味機能	標準語訳	回答
非過去肯定	今日は太郎の結婚式なので背広を着る。	kyoowa taroono kekkonsikizyaken sebiroba kiru.
過去肯定	昔は結婚式では着物を着た。	mukasiwa kekkonsikizya kimonba kiyotta.
過去肯定	花子の結婚式では着物を着た。	hanakon kekkonsikizya kimonba kita.
推量	太郎はタキシードを着るだろう。	taroowa takisiidoba kiddo.
意志	卒業式ではスーツを着よう。	sotugyoosikizya suutuba kiro.
勧誘	一緒にスーツを着ようよ。	issyoni suutuba kiroi.
命令	着物を着ろ。	kimonba kire. *kii
禁止	スーツは着るな。	suutuwa kinna.
条件	スーツさえ着れば，ネクタイはしなくてもいいよ。	suutuba kinnara nekutaiwa senzya eezo.
肯定継起	ちゃんと服を着て，寝なさい。	tyanto hukuba kite nere.
非過去連体	明日は結婚式なのに着る服が無くて，困っている。	asitawa kekkonsikibatten kiru hukuno nyaaken komattoru.
非過去否定	あまり着物は着ない。	amari kimonna kiran.
使役	太郎に着物を着させる。	tarooni kimonba kisasur.
受身	着ようと思っていた着物をあいつに着られてしまった。	kirooto omottotta kimonba ayatuni kiraretisimota.
可能	（あの服は小さくて着られないが）この服なら着ることができる。	kon kimononara kirarur.
動作継続	まだ服を着ているところだ。	mada hukuba kiyor tokorotai.
結果継続	今日はすてきな着物を着ているね。	kyoowa musyanyokatoba kitorune.

ake-「開ける」

意味機能	標準語訳	回答
非過去肯定	暑いから窓を開ける。	atukaken madoba akuru.
過去肯定	南側の窓はもう開けた。	minamigawan madoba aketa.
推量	北側の窓は花子が開けるだろう。	kitagawan madowa hanakoga akuddo.
意志	西側の窓は私が開けよう。	nisigawan madowa orega akyuu.
勧誘	（この扉は重いから）一緒に開けよう。	kon tobirawa omokaken issyoni akyui.
命令	扉を開けろ。	madoba akee/akere.
禁止	絶対に窓は開けるな。	madoba akunna.
条件	窓を開ければ，きっと涼しいよ。	madoba akutto/akunnara/aketara/aketarya suzusikayo.
肯定継起	窓を開けて，空気を入れ替えよう。	madoba aketi kuukiba irekayui.
非過去連体	その扉を開ける鍵は，無くしてしまった。	son tobiraba akuru kagiba noonarakyata.
非過去否定	この窓は，あまり開けない。	konmadowa anmari aken *akeran
非過去否定（取り立て）	絶対にこの窓を開けはしない。	zettaini konomadoba akewasen.
使役	門番に，門を開けさせる。	monbanni monba akesasur.
受身	（鍵を掛けていたのに）泥棒に窓を開けられた。	kagiba kaketottabattenga dorobooni monba akerareta
可能	簡単にこの窓は開けられる。	konomadowa kantanni akerarur.
動作継続	今，窓を開けている（ところだ）。	madoba akeyot tokottai.
結果継続	太郎が窓を開けている。	tarooga madoba kyaaaketoru.

ko/ki/ku-「来る」

意味機能	標準語訳	回答
非過去肯定	新聞屋さんがもうすぐ来るよ。	sinbunyasanno moosugu korasubai.
非過去肯定	船がもうすぐ来るよ。	hunega moosugu kurubai.
過去肯定	昨日は四時半に来た。	kinoowa yozihanni kita.
推量	そろそろ船が来るだろう。	sorosoro hunen kuddo.
意志	明日また来よう	asita mata kuu.*ku
勧誘	一緒にまた来よう	issyonimata kuui.*kyuui
命令	早くこっちに来い。	hayo kotti kee.
禁止	こっちに来るな。	kottyan/kottinya kuruna.
条件	こっちに来るといいものが見られるよ。	kotti kutto/kunnara/*kitanara yokatuno miraruzzo.
肯定継起	こっちに来て一緒に食べよう。	kottyan/kotti kite issyoni kuuzo.
非過去連体	学校に来るときはお菓子を持ってきてはいけないよ。	gakkouni kuttokyaa okasiba mottekutto ikanbai.
非過去否定	今日は雨だから，あんまりお客さんが来ない。	kyoowa amedaken anmari okyakusanno korassan.
非過去否定	あいつは来ない。	aituwa kon.
過去否定	今日は，お客さんが来なかった。	kyoowa okyakusanno korassazyatta/korassanzyatta.
過去否定	あいつは来なかった。	aituwa kozyatta.
非過去否定	今日は台風だから，絶対にお客さんは来ない。	kyouwa taihuudaken zettaini okyakusanwa korassando.
非過去否定（取り立て）	もう絶対ここには来はしない。	mo zettai kon/kiwasen.
使役	友達を家に来させる。	tomodatiba ieni korasuru. ＊kosasuru
可能	明日も時間があるから来られるよ。	asitamo zikannoaruken korarubbai.*kikiru

se/si/su-「する」

意味機能	標準語訳	回答
非過去肯定	毎日仕事をする。	myaaniti sigotuba suru.
過去肯定	昨日も仕事をした。	kinoomo sigotuba sita.
推量	太郎は夏休み中も休まず仕事をするだろう。	taroowa natuyasumityuumo yasumande sigotuba suddoo.
意志	そろそろ仕事をしよう。	sorosoro sigotuba syuu.
勧誘	一緒に相撲をしよう。	issyoni sumooba syuui
命令	仕事をしろ。	sigotuba see.*sero,*sere
禁止	仕事はするな。	sigotuwa sunna.
条件	ちゃんと仕事をすれば，お金がもらえるよ。	tyanto sigotuba sutto/sunnara/sitanara, kanen morayuzzo.
肯定継起	ちゃんと仕事をして，それからテレビを見ろ。	tyanto sigotuba site, sorukara terebiba mire.
非過去連体	仕事をするときは，テレビを消せ。	sigotuba suttokiwa, terebiba kese.
非過去否定	土曜日はあんまり仕事をしない。	doyoobiwa anmari sigotuba sen
非過去否定（取り立て）	日曜日は絶対に仕事をしはしない。	nitiyoobiwa zettai sigotuba siwasenzo.
義務	また月曜日から仕事をしなければならない。	mata getuyoubikara sigotuba senyan/sentoikan.
使役	（子どもに）宿題をさせるのも一苦労だ。	syukudaiba sasuttomo hitokuroobai.
受身	太郎に先に仕事をされると，私の仕事がなくなる。	tarooni sakini sigotuba sarutto, oruga sigotuno noonaru.
動作継続	夜中なのにまだ仕事をしている。	yonakabatten mada sigotuba siyoru.
結果継続	もうその部屋は掃除をしている（終わっているという意味で）	souziba sitobbai.

付録 2 自然談話データ

以下に，TH 氏による自然談話を示す。動詞に関する部分については，付録 3 にて詳細に記述し，付録 2 では音声データと，簡易的に全文訳を示す。分かち書きは，3.6 節に示した定義に基づき，便宜的に行う。

この自然談話は，2021 年 7 月に菊鹿方言話者 YT 氏の協力を得て収録した。不明瞭で聞き取りが困難であった箇所は，***とし，言い淀みがあった箇所は…としている[20]。

（少年期の遊びに関して質問）

(91) *syoogakkoon tokino asobiti yuuto….*
「小学校の時の遊びと言うと…」

(92) *iti, ni, sannensee guraizyaro*
「一，二，三年生ぐらいでしょう。」

(93) *oboetoranne dogyan asobiba sitaka.*
「覚えていないなあ，どんな遊びをしたか。」

(94) *betawa siyottane.*
「めんこはしていたね。」

(95) *beta, komamawasi, sorekara… assage.*
「めんこ，コマ回し，それから…竹馬」

(96) *take tukote note kuzyanyaaya.*
「竹を使って乗っていくじゃないか。」

(97) *“kyoowa kaettara nansyuuka” te yuuken, “assagezi asobuzo.” teyuute…*
「『今日は帰ったら何をしようか』と言うから，『竹馬で遊ぶぞ』と言って…」

（中略）

[20] この記述方法は松岡（2021）を参照している。

(98) *hotondo yamasan ikiyottane.*
「ほとんど山に行っていたね。」

(99) *yamani kakurega tukuttari.*
「山に隠れ家を作ったり。」

(100) *asukoni kakuregaba mukooto kottito wakaretine.*
「あそこに隠れ家を，向こうとこっちと分かれてね,

(101) *tyanbaranogotatto siyottabo yappa.*
チャンバラのようなことをしていただろう，やっぱり。」

(102) *yamaimohorimo ikiyottabo.*
「山芋掘りも行っていただろう。」

(103) *mezirootosi, sorukara battaritaine.*
「メジロ獲り，それから，バッタリだよね。」

(104) ****nogotu gyan tukurumon.*
「***のように，このように作るんだよ。」

(105) *site, sokoni roopuba tuketi, koo hinettekara ***nohoobane batanto.*
「そして，そこにロープを付けて，こう，ひねって***の方をね，ばたんと。」

(106) *araa hoziroba toriyottattaine.*
「あれはホオジロを獲っていたんだよね。」

(107) *sosuto yamazya hiyon***ne.*
「そうすると，山ではヒヨドリの***ね。」

(108) *hiyotoka kizitai. tyousenkizi.*
「ヒヨドリとか雉だよ。チョウセンキジ。」

(109) *aruba korekuraino kiba otteta…*
「あれを，これくらいの木を折ってさ…」

(110) **** hasamaruttotaine kubito senakaba.*
「***挟まれるんだよね，首と背中を。」

(111) *yoo toriyottazo.*
「よく獲っていたぞ。」

(112) *daken moo sorega tanosimizya attane.*
「だからもうそれが楽しみではあったね。」

(113) *“kyoowa bennkyoosedena…” benkyoosedenati yuuka,*
「『今日は勉強しないで…』勉強しないでと言うか,

sogyankotubakka kangaeyoru monzyakennee.
そんなことばかり考えているものだからねぇ。」

(114) *asukeno naka kakattorugotannate yuutikannee.*
「あそこの中に（鳥が）かかっているみたいだねって言ってね,

dadden sogyan omottottai.
誰でもそう思っているだろう。」

（中略）

(115) *konomae sokon ****
「この前そこの***」

(116) *koggyan hutokatuba tuttonnaharutoba mitane.*
「こんなに太いのを釣っていらっしゃるのを見たね。」

(117) *koggyan hutee. hazimeti.*
「こんなに太い，初めて。」

(118) *“orumo kogyanto hazimet tutta”tiyuutikaru…*
「『俺もこんなの初めて釣った』と言って…」

(119) *“dogyankaita, unagino harikomiwa.” tiyuutatokoruga,*
「『どうですか，うなぎの張り込みは』と言ったところ，

(120) *“tyotto kinase. tamagarugotattono kakattaken.”te.*
『ちょっと来なさい。驚くようなものがかかったから。』と。」

(121) *mada kuttya onnarante omoubattenne.*
「まだ食べてはいらっしゃらないと思うけどね」

(122) *sensui*** asuke iretonnaarumon.*
「泉水***あそこに入れていらっしゃるもの。」

(123) *ami iretikanne. asuke oitonnaaru.*
「網を入れてね，あそこに置いていらっしゃる。」

(124) *ikiyonnattai. unagiga ikigainogotaru hitodaken.*
「行っていらっしゃるよ，うなぎが生きがいのような人だから。」

(125) *anohitokaru morotakotumo arumon.*
「あの人から貰ったこともあるもの。」

（中略，鳥を飼うときの話）

(126) *ippiki guraisika*** yasinawarentozyaro.*
「一匹ぐらいしか***育てることができないのだろう。」

(127) *negauto yokazzyarobattenne.*
「申請するといいんだろうけどね。」

(128) *oddonga ayuturinankamo nanden irumon.*
「私の鮎釣りなんかも何でも（許可が）必要であるもの。」

(129) *daken atadoma kansiinno mawattekurumonne.*
「だからあなた監視員が回ってくるものね。」

（小学校でやっていた遊びの話）

(130) *hutadde kundesuruyatuya, koosite mekakusite keruyatuya,*
「二人で組んでするやつか，こうして目を隠して蹴るやつか,

naago tunagaruyatuya.
長く繋がる奴か。」

(131) *byanbyan hasetene, *** itiban ketuno yatukara teoitekara nibanmeka***.*
「びゃんびゃん走ってね, ***一番後ろの人から手を置いて, 二番目か***。」

(132) *batten kuzuretanara mata senanmonzyankenne.*
「だけど崩れたらまたしなければならないものだからね。」

(133) *sosite zuuutto zyanken suddoga.*
「そしてずうっとじゃんけんするだろう。」

(134) *itibanmentoga zyanken site kattanara…maketanara kootaizyaro***.*
「一番目の人がじゃんけんをして勝ったら…負けたら交代だろう。」

(135) *ueni norumongane.*
「上に乗る人がね。」

(136) *sosuto, himawatte *** agyanna asobiba siyottane.*
「そうすると，ヒマワリという***あのような遊びをしていたね。」

(137) *mukasiwane gurugurumawatte saigowa nakasan hyaatte ikiyottamonne.*
「昔はね，ぐるぐる回って最後は中に入っていっていたものね。」

(138) *sosite osidasikananka ***.*
「そして押し出しかなにか***」

(139) *omosirokattabo himawariwa.*
「面白かっただろうヒマワリは。」

（給食の話）

(140) *kyuusyokuwa, maewa motteikiyottakenne, yasainogotattoba.*
「給食は，前は持って行っていたからね，野菜のようなものを。」

(141) *daken, zibunkatade dekitatuba*
「だから，自分の家でできたものを

nandenyokaken mottekanyantutaine.
なんでもいいから持って行かなければならないんだよね。」

(142) *syoogakkooni attaken, tukurasutokonno.*
「小学校にあったよ，お作りになる所が。」

(143) *gyuunyuunogotattowa dassihunnnyuunogotattone.*
「牛乳のようなものは脱脂粉乳のようなものだね。」

(144) *yakanni iretiaru konaba…*
「やかんに入れてから粉を…」

(145) *tonikaku mirukutaine. nansama mirukute iiyottaken.*
「とにかくミルクだよね。なにしろミルクと言っていたから。」

(146) *kaneno, arumitiyuuka, aretai,*
「金属の，アルミニウムというか，あれだよ，

minano arebakattai, hokantoba tugasutomo… konkurainone.
みんなのあればかりだよ，他のものをお注ぎになるのも…このぐらいのね。」

（部落に関する話）

(147) *daitai kamino monga hayakamon.*
「大体上の人が早いんだよ。」

(148) *“gakkouni ikooi” tiyuutikara korasukenne.*
「『学校に行こう』と言っていらっしゃるからね。」

(149) *sosuto “haihaai” teyuutikara*
「そうすると『はいはあい』と言って,

maniawangotattokiwa “tyotto ikiyotte haiyo”te,
間に合わないような時は『ちょっと行っていてください』と,

batabata minazure deteikiyottatai.
ばたばた皆で出て行っていたよ。」

(150) *denhatakebakadde zyuu… san, yonin ottakenne.*
「土井畑（の人）ばかりで十…三，四人居たからね。」

(151) *denhatakebakaddezo.*
「土井畑（の人）ばかりでだぞ。」

(152) *zyakee honmura, attiba katunnaraba, nizyuu go, rokuninna ottabo.*
「だから本村，あっちを入れるなら，二十五，六人は居ただろう。」

(153) *hasittari, aruitaritai.*
「走ったり，歩いたりだよ。」

(154) *undoukaino burakunnakazya asagowa dantotuzyattatai.*
「運動会の部落の中では阿佐古は断トツだったよ。」

(155) *asagoni simohonbunatarimo hayakattane. …nagayama.*
「阿佐古に下本分辺りも速かったね. …永山。」

(156) *kaku burakuni ittiimuzutu dekiyottamonzyakenee.*
「各部落に一チームずつできていたものだからねえ。」

(157) *sohutobooruwane, oddonga syoogakkoogonenseeka rokunenseegorokara hazimeta.*
「ソフトボールはね，私が小学校五年生か六年生頃から始めた。」

(158) *sonkorobai, hayattekitatuwa.*
「その頃だよ，流行ってきたのは。」

(159) *soruga maemazyaa, attakamosirenbatten,*
「その前までは，あったかもしれないけど，

(160) *sogyan sohutoboorutetyaa siyorayattane.*
そのようなソフトボールと言ってはしていなかったね。」

(161) *mutukado ittarataa, asuka hiirokattaken*
「六つ角に行ったらさ，あそこは広かったから，

sokoni… denhatakenmonto obatakenomontaine, ittekaru
そこに…土井畑の人と小畑の人だね，行って，

sankakubeesunogotattoba tukutte, sikakuzyanyaatai sankakutai,
三角ベースのようなものを作って，四角じゃないよ三角よ，

aruba tukutte asobiyottatai.
あれを作って遊んでいたよ。」

(162) *asuko "baa kokowa hireenaa"te iiyottaken.*
「あそこは『わあここは広いなあ』と言っていたんだよ。」

(163) *site imawa kiino attagoo nattorubatten, mukasiwa sogyan kiwane,*
「それで今は木があったようになっているけど，昔はそんなに木はね，

sitandanni zoukino aresitottabattenga totemo yokatokozyattamon.
下の段に雑木があれしていたけれどとてもいいところだったもの。」

(164) *honnakote muutu attaken.*
「本当に六つあったから。」

(165) *dagobatini sasaretakotuno attainee.*
「オオスズメバチに刺されたことがあるんだよね。」

(166) *yappa sasare*** dogyansitemo, ottokoni syanmuri ikumonzyakee.*
「やっぱり刺され***どうしても，いる所にどうしても行くものだから。」

(167) *“dagobattaizini kyoowa ikoka”tiyuutene, ano atukatokini.*
「『オオスズメバチ退治に今日は行こうか』と言ってね，あんな暑い時に。」

(168) *batten aruga mou honnakote bunbun yuutika, antokiwane, koo*
「しかしあれがもう本当にブンブン言って，あの時はね，こう，

kakuretoddoga, ueba bunbun, antokiwa moo
隠れているでしょ，上をブンブン，あの時はもう，

“itu sasarewa sendoka”te,
『いつ刺されるだろうか』と，

“ozittekite, senakaba koo sasarewa sendoka”te iyaiya siyottatai.
『降りてきて，背中をこう刺されはしないだろうか』といやいやしていたよ。」

(169) *saseruttamonwa “*** sasarewa sendoka ”te kaosite*
「刺された人は『***刺されはしないだろうか』という顔をして，

annozyoone, sitasan oritara syatuno uekaramo guruguru mawaru monne.
案の定ね，下に降りたらシャツの上からもぐるぐる回るんだよね。」

(170) *nankaika sasumon.*
「何回か刺すもの。」

(171) *mikkadomo yasudabo.*
「三日ぐらいは休んだだろう。」

(172) *gomuzyuu, areba koo teppouno katati tukuttekara, areba minazure mottettene,*
「ゴム鉄砲，あれをこう，鉄砲の形を作って，あれを皆で持って行ってね，

*** siti hatinin orumonde minazure *** doreka atattotai.*
*** 七，八人居るもので，皆で *** どれか当たるんだよ。」

(173) *“yattuketaa”tikara darekane.*

「『やっつけたあ』と，誰かがね。」

グロス一覧

ACC : 対格 / CND : 条件 / COP : コピュラ / DEM : 指示詞/ EMP : 強意 / HORT : 勧誘/ INT : 意志 / MPRF : モーダルな完了 / NEG :否定 / NOM : 主格 / OBL : 義務 / PROG : 継続 / PST : 過去 / THM : 語幹母音 / TOP : 主題

謝辞

本論文を執筆するにあたり，多くの皆様方にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

指導教官の下地理則先生は，卒業論文の執筆にあたり手厚い指導をしてくださいました。面談の度にさまざな分析の可能性を与えてくださり，気づけば，論文執筆の過程の中で方言記述を心から「おもしろい」と感じるようになっていました。最初は屈折の「く」の字も分からないような状態でしたが，そこからここまで来ることができたのは，先生があたたかく見守り，指導してくださったおかげです。

本論文の執筆にあたり，熊本県山鹿市菊鹿町の方々に多くのご協力を賜りました。山鹿市菊鹿市民センターの皆様は，菊鹿方言のことを調査したいと門戸を叩いた私をあたたかく迎え入れてくださり，先行研究の提供，菊鹿方言話者の紹介など，様々な面で助けてくださいました。実際に調査に協力してくださった三名の話者の皆様は，日々電話での調査に積極的に協力してくださり，挫けそうなときにもその優しさに支えられました。

研究室の上山あゆみ先生，太田真理先生，久保智之先生には，2 年次より講義，演習で大変お世話になりました。テーマ発表会でも貴重なご助言を賜り，励みになりました。

研究室の先輩方にもお世話になりました。占部由子さん，松岡葵さんをはじめとする研究室の諸先輩方は，日頃からアットホームな雰囲気の中で，丁寧に分かりやすく言語学の基礎を教えてくださいました。先輩方の研究への姿勢が私にとっての指針となっており，その存在に何度も救われました。

ゼミで同期の池美礼さん，小林宙夢さん，是枝美羽さん，徳永理子さんとは，論文完成に向けて連日互いを鼓舞しあい，切磋琢磨しながら取り組むことができました。同期の存在，その優しさ，ひたむきさが，論文執筆のなによりの糧でした。

研究室の他ゼミの同期の皆さんとも会う度に進捗を共有し，刺激を受けていました。素晴らしい同期の皆さんに出会えたこと，本当に有難く感じています。

最後に，忙しい中，菊鹿方言話者と私を引き合わせてくれた父，地元菊鹿町からいつも私の心に寄り添い支え続けてくれた母，姉妹に心から感謝いたします。

ありがとうございました。